

# 宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

## 第45集

木幡神社遺跡、妙見古墓・妙見遺跡、菟道遺跡、  
立命館宇治高等学校移転予定地



1999

宇治市教育委員会

# 宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第45集

木幡神社遺跡

妙見古墓・妙見遺跡

菟道遺跡

立命館宇治高等学校移転予定地

1999

宇治市教育委員会

## 序

宇治市内では、近年宅地開発や共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査が増えています。

本書は、宇治市教育委員会が開発事業に伴って発掘調査いたしました木幡神社遺跡、妙見古墓、菟道遺跡、立命館宇治高等学校移転予定地での成果の概要をまとめたものです。

木幡神社遺跡では、今回の調査で初めて遺跡の具体的な内容が明らかになりました。古墳や集落が予想を上回る密度で展開している状況からは、古墳時代から奈良時代にかけて、交通の要衝として当地の重要性が急速に増し、集落の発展が促された様子が明らかになりました。妙見古墓も今回新たに発見された遺跡であり、周辺が、菟道一帯における奈良時代の墓域であることが把握できる成果となりました。また、菟道遺跡、立命館宇治高等学校移転予定地においても、かつての土地利用の実態が明らかになりました。

これらの成果をまとめた本書が多くの方々の目にとまり、広く宇治の歴史を知る契機となることを願うものです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました開発事業者の方々をはじめ、調査期間中にご指導、ご助力を賜りました関係各位に対して心より御礼を申し上げます。

平成11年 3月

宇治市教育委員会

教育長 谷口道夫

## 例 言

1. 本書は、『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』の第45集である。
2. 本書は、宇治市教育委員会が平成10年度に実施した、開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査および確認調査の概要を取りまとめたものである。

名 称	調 査 地	原 因	調 査 期 間	調査面積
こはたじんじやいせき 木幡神社遺跡	木幡東中10-3	保 育 所 建 設	H10. 9. 7～ H10.12.15	190㎡
みょうげんこぼ みょうげんいせき 妙見古墓・妙見遺跡	菟道妙見9-2 他18筆	宅地造成	H10. 4.30～ H10. 7.31	850㎡
とどろいせき 菟道遺跡	菟道谷下り36-1、25-1 地内	道路拡幅	H10.11.24～ H10.11.30	20㎡
りつめいかんろう しこうとうがっこう 立命館宇治高等学校 いってんよていち 移転予定地	広野町八軒屋谷	校地造成 校舎建設	H11. 2.12～ H11. 3.12	111㎡

3. 発掘調査は、下記の体制で実施した。

発掘主体者：宇治市教育委員会

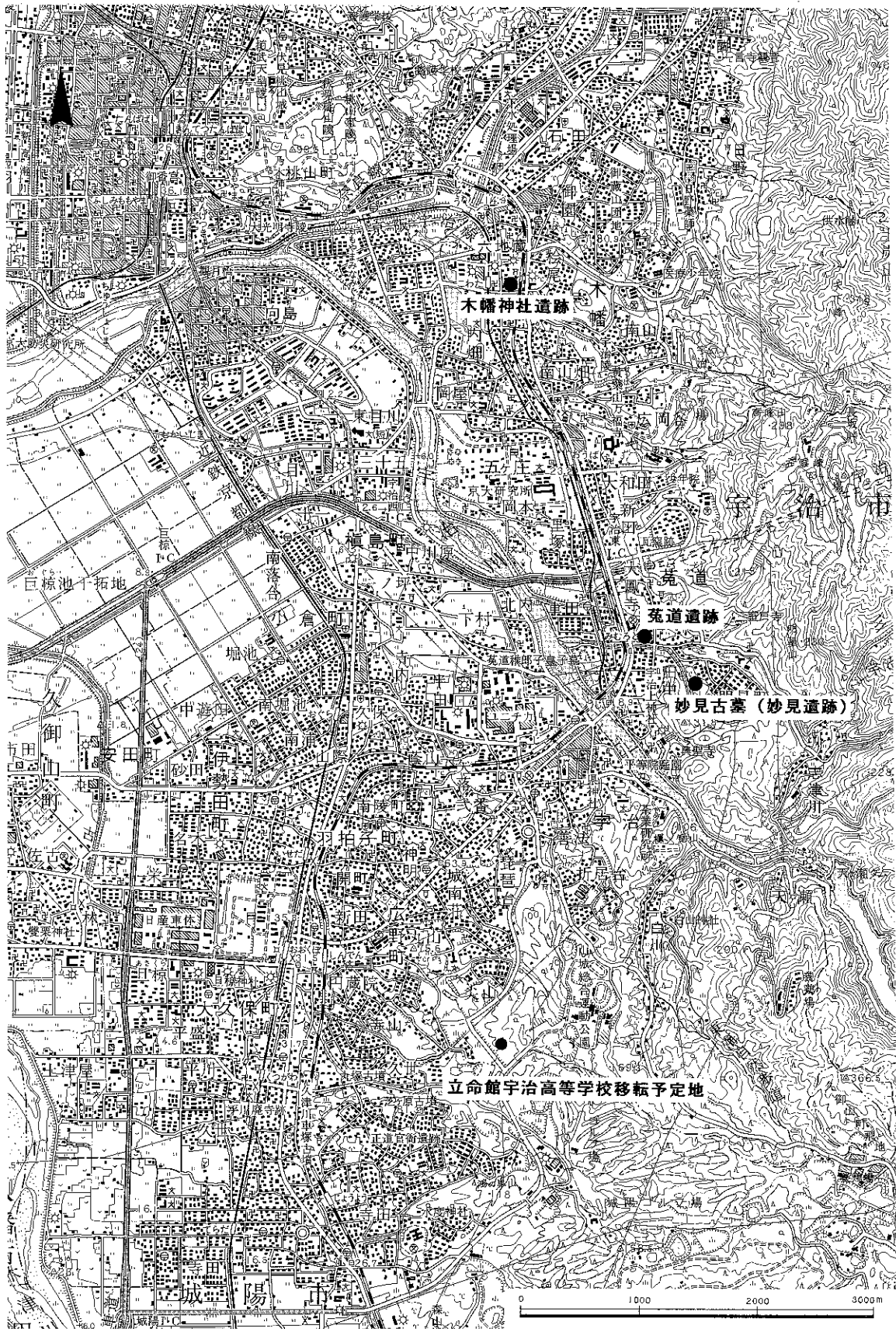
発掘責任者：宇治市教育委員会 教育長 谷 口 道 夫

発掘担当者：宇治市歴史資料館 文化財保護係 主事 荒 川 史  
嘱託 吹 田 直 子

発掘事務局：宇治市歴史資料館 館長 源 城 政 好  
主幹兼文化財保護係長 吉 水 利 明  
館長補佐 岡 井 毅 芳

調査参加者：宮崎 弥・荒木浩一・山中 聡・内田真雄・古岡美佐・小林俊之・久保千恵子・志村みどり・  
畑 陽子

4. 本発掘調査の関係資料および出土品は、宇治市教育委員会が保管している。
5. 本書が使用する遺物写真は寿福滋氏に撮影依頼したものである。発掘現地での各遺構は担当者が撮影した。
6. 本書の編集は宇治市歴史資料館が行い、実務を荒川・吹田が担当した。執筆は荒川（I-1・2・5、IV）、吹田（I-3・4、II、III）が担当した。



# 目 次

<b>I 木幡神社遺跡（木幡東中10-3）発掘調査概要</b>	
1. はじめに .....	1
2. 検出遺構 .....	2
3. 出土遺物 .....	6
4. まとめ .....	16
<b>II 妙見古墓・妙見遺跡（菟道妙見9-2他）発掘調査概要</b>	
1. はじめに .....	17
2. 試掘調査の概要 .....	18
3. 発掘調査の経過 .....	20
4. 検出遺構 .....	21
5. 出土遺物 .....	24
6. まとめ .....	26
<b>III 菟道遺跡（菟道谷下り36-1、25-1地内）発掘調査概要</b>	
1. はじめに .....	27
2. 調査の概要 .....	28
<b>IV 立命館宇治高等学校移転予定地埋蔵文化財発掘調査概要</b>	
1. はじめに .....	29
2. 調査の概要 .....	30
註 .....	33
抄 録 .....	34



# I. 木幡神社遺跡発掘調査概要

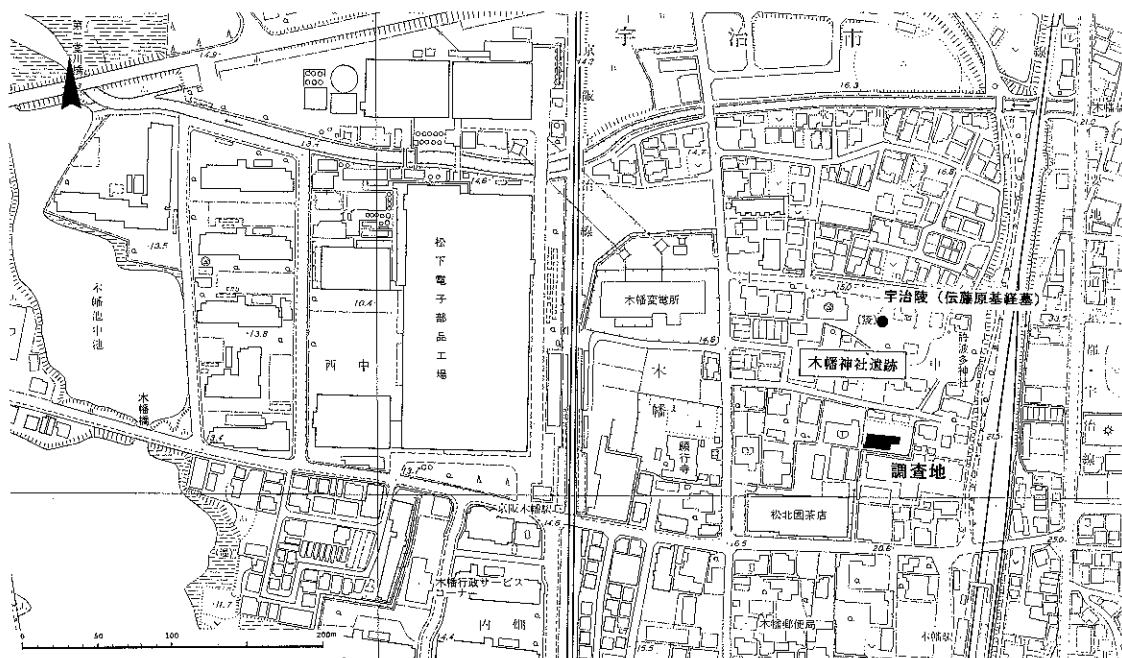
(木幡東中10-3)

## 1. はじめに

本報告は、宇治市木幡東中10-3で実施した、宇治市立木幡保育所の建て替えに伴う木幡神社遺跡発掘調査の概要報告である。

木幡地域においては、これまで南山城最大規模の木幡古墳群や藤原氏関係の宇治陵など、古墳や墳墓に関係する遺跡が知られていたが、集落遺跡についてはよく知られていなかった。ところが、近年調査地の南方にある西浦遺跡において、5次にわたる調査<sup>1)</sup>が行われ、古墳時代から中世に至る集落の状況が徐々に明らかになってきた。それによれば、旧大和街道付近を中心に、かなり広範囲に集落が広がっていたことが窺える。

木幡神社遺跡は、宇治市木幡東中の木幡神社周辺に広がる遺跡で、遺物散布地として知られている遺跡である。平成4年度に今回の調査地の北西約100mの地点で木幡地域福祉センター建設に伴う調査を実施しているが、近世の瓦や陶器類が出土したほかには顕著な遺構・遺物は検出しておらず、具体的な遺跡の内容はよくわかっていなかった。そのため、前述の西浦遺跡の調査成果とも併せて、木幡付近の集落の中心は西浦遺跡周辺にあり、木幡神社周辺では顕著な集落はないものと予想された。ところが予想に反して、古墳時代から中世にかけての遺構や遺物を検出し、木幡神社付近にも重要な遺跡が広がっていることが明らかになってきた。調査は、平成10年9月7日から開始し、平成10年12月25日に終了した。



第1図 調査地の位置

## 2. 検出遺構

調査は、調査地の茶木の伐採・除去から開始した。調査前の段階では、顕著な遺構がある可能性は少ないものと考えられたため、50㎡の調査を予定していた。ところが、伐採の段階から調査地内に須恵器・土師器などの遺物が散布していることがわかり、調査面積を100㎡と拡大して調査を開始した。

調査地における基本的な土層は、表土及び耕作の及んでいる茶褐色土層の下位に、火山灰の再堆積と見られる黒褐色粘質土層があり、その下層には大阪層群である黄褐色粘質土層や砂礫層となる。遺構は、黒褐色土層上面から掘り込まれているものと考えられる。

今回の調査で検出した遺構には、大溝・溝・土壇・ピットがある。この内大溝SD04はトレンチの南部で検出した蛇行する溝で、その平面形状から前方後円墳である可能性が考えられた。このため、さらにトレンチの南部を拡張した。その結果、最終的な調査面積は190㎡となった。以下、各遺構について述べていく。

溝SD04 トレンチ西辺から弧を描くように南東にのび、屈曲して東方にのびる。そして

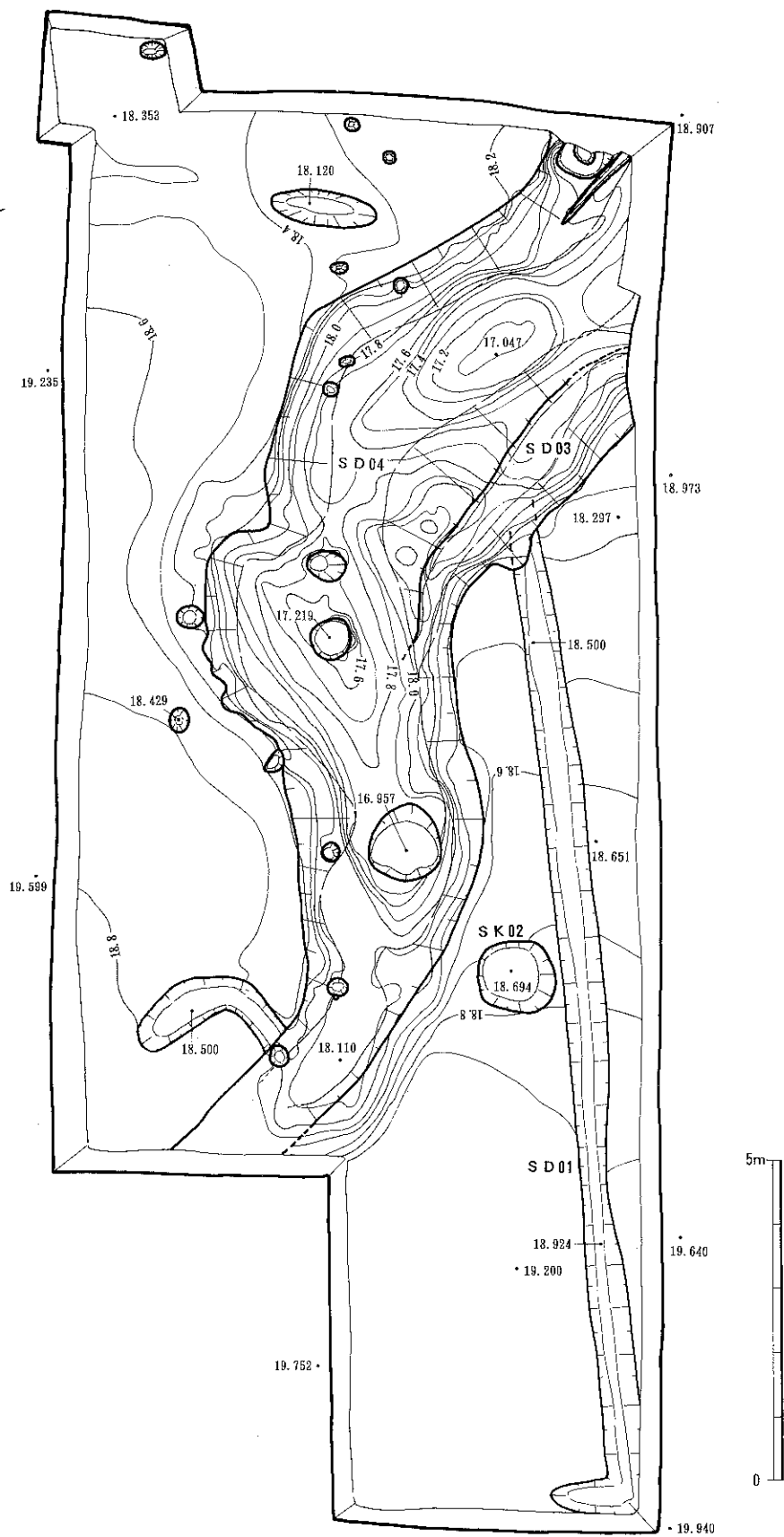


第2図 調査地全景写真（東から）

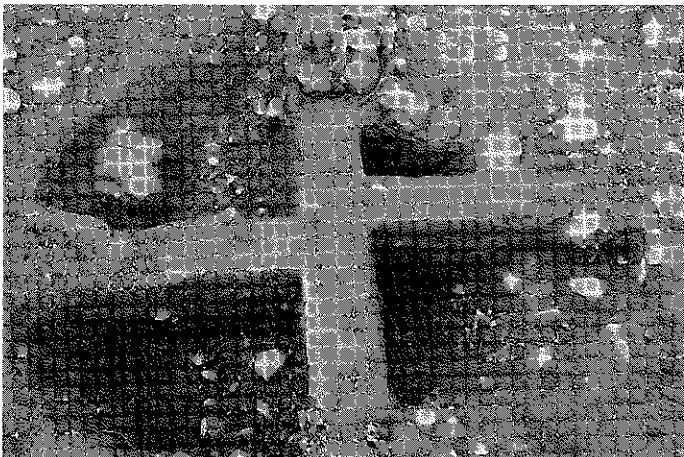
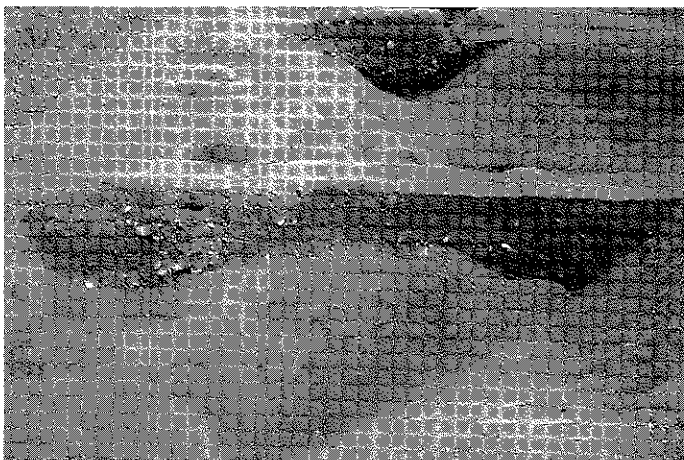
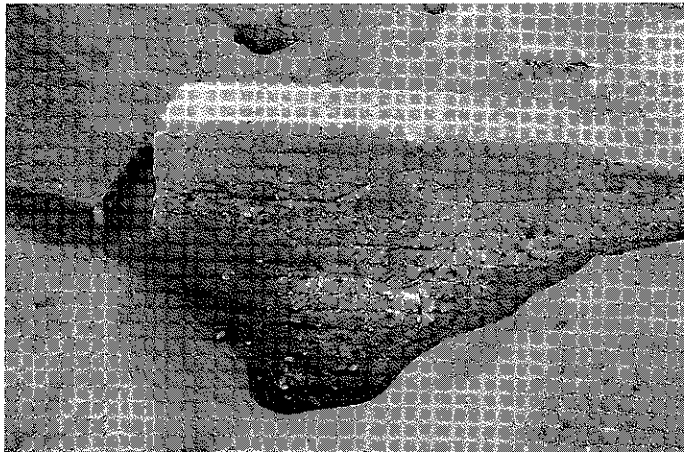
トレンチ中部で南方に屈曲する。検出した溝の全長は17m、幅1.4m～4m、深さ0.45m～1.2mである。溝底のレベルは一樣でなく、屈曲部が馬の背状に浅くなっている。また底面には3基の土壇があり、東端の土壇は北側の壁面が袋状になっている。

検出した当初、溝の形状及び6世紀前半代の須恵器が出土したことから、前方後円墳の一部と考え掘削を行った。掘削の結果、溝内からは古墳時代の土器や埴輪が出土しているが、むしろ7世紀後半から8世紀の遺物が多量に出土している。また前方部と想定できる部分の溝が、明瞭に屈曲しておらず、また溝の幅も狭く浅いことから、遺構の性格を明確にしかねる。このことから前方後円墳の周溝を飛鳥・奈良時代に再利用したものか、飛鳥・奈良時代の溝に周辺にあった古墳時





第3図 トレンチ実測図



第4図 遺構写真(すべて西から)  
(上: SD04B-B'土層、中: SD04A-A'土層、  
下: SK02遺物出土状況)

溝SD01 幅約0.6m、検出長約15mの東西溝である。今回検出した遺構の中で唯一中世の遺構である。溝内からは土師器の皿や信楽の大甕の破片が出土している。区画溝として機能していたものか。

代の遺物が流入したかの二つの可能性が考えられるが、ここでは結論を留保しておきたい。

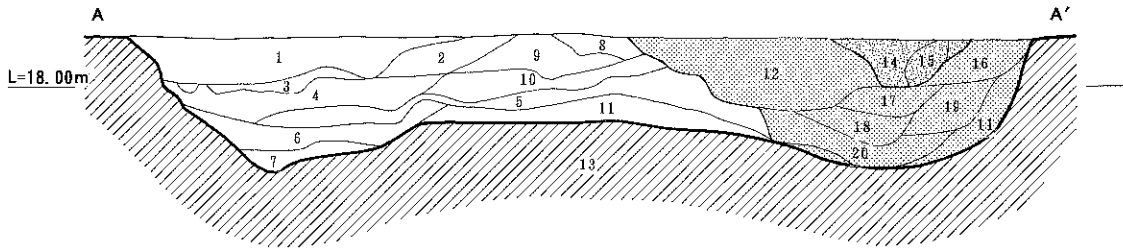
飛鳥・奈良時代の遺物には、須恵器・土師器の土器類の他に、鉄滓・瓦などがある。また須恵器の中には水滴もあり、官衙や寺院的な性格を持つ遺物が出土している点特徴的である。

なお、土壌SK02の南に位置するピットは、SK04に切られた状態で検出している。このピット内からは庄内式の甕が出土している。

溝SD03 溝SD04の円弧を描く部分の北辺に接している溝である。検出段階では、SD04と識別ができなかったが、掘削途中で埋土の違いから別の溝であることがわかった。溝内からは瓦が出土しているが、古墳時代の土器は認められない。SD04が埋没した段階に拡張して掘り直した溝と考えられる。

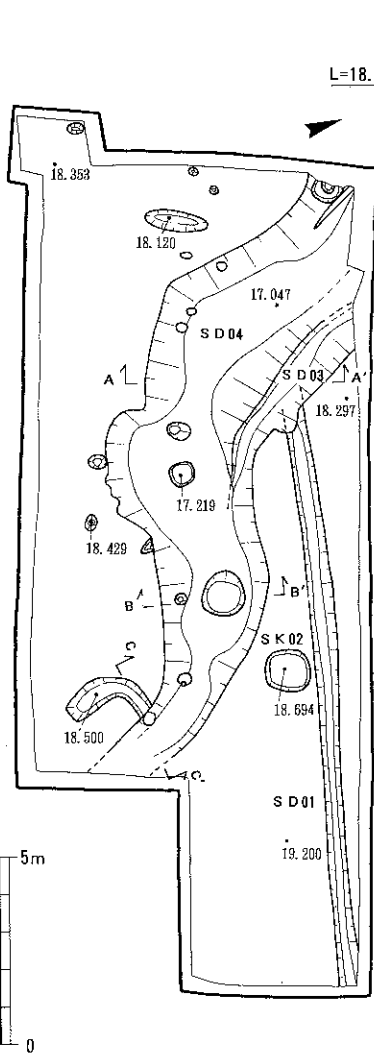
土壌SK02 溝SD04が屈曲する部分の北にある円形の土壌である。直径1.2m、深さ0.2mを測り、底面は皿状を呈する。土壌内からは焼土・炭と共に土師器の甕が2個体出土している。

L=18.50m

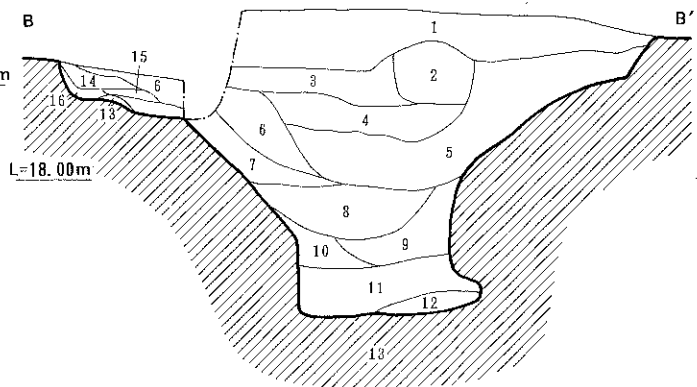


1. 暗褐色粘質土 2. 褐色土 3. 暗褐色砂質土 (礫含む) 4. 淡褐色粘質土 5. 暗褐色土 (礫含む)
6. 褐色粘質土 7. 暗褐色砂質土 (礫含む) 8. 褐色粘質土 (礫含む) 9. 褐色土 (礫含む)
10. 褐色粘質土 (礫含む) 11. 淡黄褐色砂質土 (礫含む) 12. 淡褐色土 (礫含む) 13. 橙褐色粘質土 (地山)
14. 暗褐色粘質土 15. 淡褐色砂質土 (礫含む) 16. 黄褐色砂質土 (礫含む)
17. 暗褐色粘質土 18. 褐色粘質土 (砂含む) 19. 淡褐色砂質土 (礫含む) 20. 淡褐色土 (礫含む)

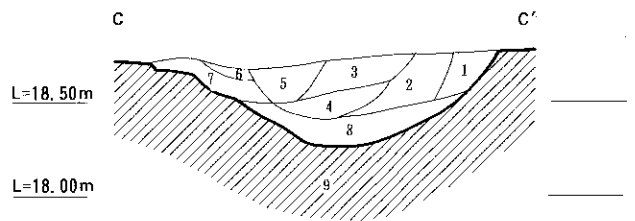
S D 01埋土    
  S D 03埋土    
  S D 04埋土



L=18.50m



1. 黄褐色砂質土 (奈良~室町時代遺物含む包含層) 2. 淡褐色砂質土 (濘埋土か)
3. 暗褐色砂質土 (礫含む) 4. 褐色砂質土 5. 褐色土 (礫含む)
6. 褐色土 7. 暗褐色砂質土 8. 暗灰色砂質土 (礫含む)
9. 褐色土 10. 黄褐色砂質土 (礫含む) 11. 灰褐色砂質土 12. 褐色土
13. 黄色土 (地山) 14. 暗褐色土 (礫含む) 15. 暗褐色粘質土
16. 黄褐色土 (礫含む)



1. 褐色砂質土 2. 褐色土 (礫含む) 3. 褐色砂質土 4. 暗褐色砂質土
5. 黄色砂質土 (礫含む) 6. 淡褐色砂質土 7. 褐色砂質土 8. 褐色砂質土 (礫含む)
9. 黄色土 (地山)

0 2m

第5図 SD04土層図

### 3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱に約17箱ある。種類には土器類（土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器）、瓦、埴輪、陶棺、砥石、鉄滓などがあり、この中の約14箱は土器類で占められる。また多くの遺物はS D04埋土から出土したもので、本報告の中心となる。他にはS K02やS D01、包含層出土のものがある。時代は、大きくは飛鳥から奈良時代にかけての一群と、室町時代、古墳時代のものがある。以下、各遺構ごとに報告を行う。

#### a. 溝S D04出土遺物（第6～11図）

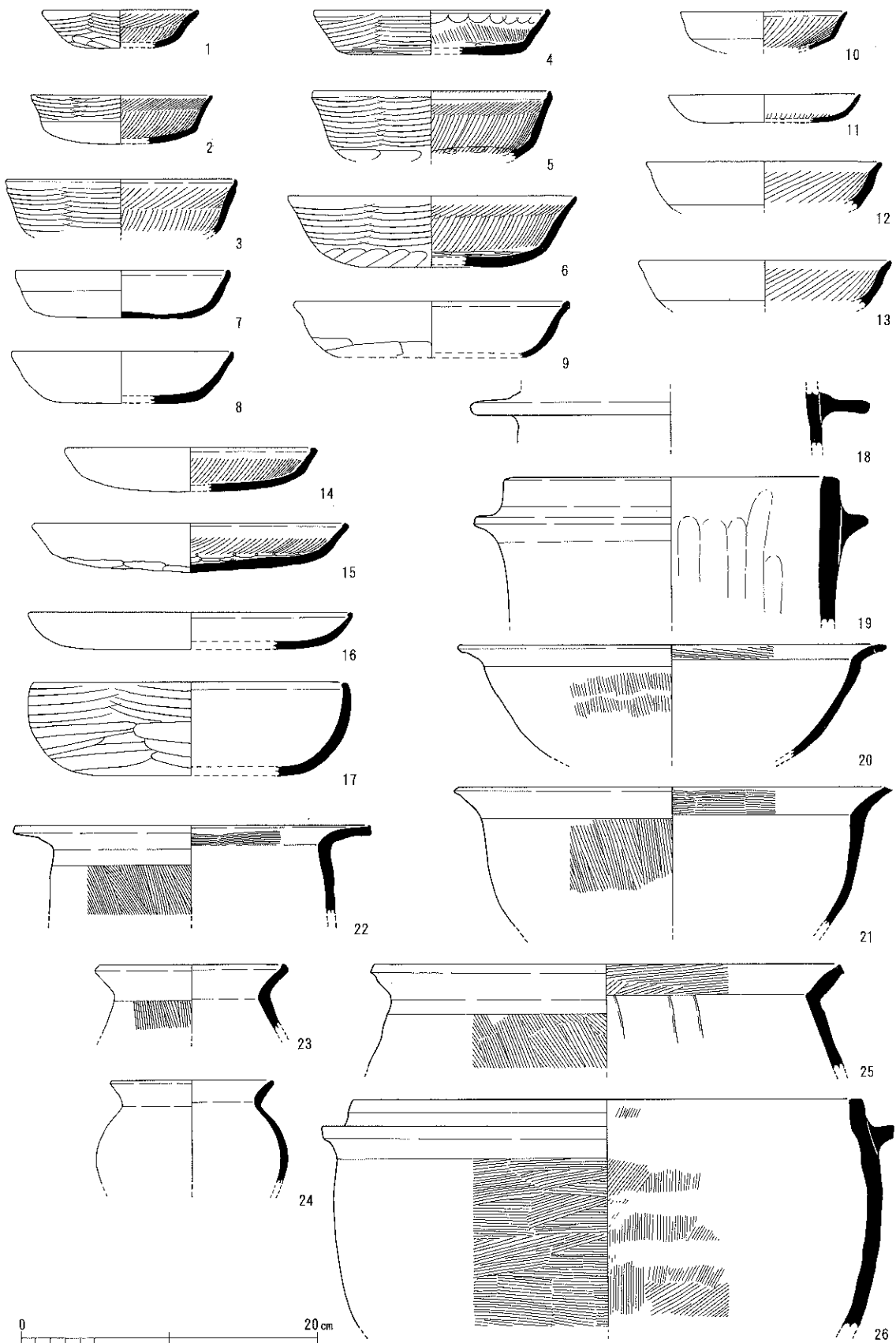
土器類（土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器）、埴輪、陶棺、砥石、瓦、鉄滓がある。土器類は、概ね7世紀末から8世紀前半にかけてのものであり、瓦と鉄滓も、包蔵状況から当該期のものである可能性が高いとみられる。また、古墳時代の遺物がある。これらは、いずれの遺物も溝の中層から上層にかけて含まれていたもので、土器の多くは破片化していたが、完形品に近いものが数点含まれている。

この他に中世土器（土師器・瓦器・瓦質土器・陶器）がある。これらは、状況的には遺構が埋没した後に形成された包含層、あるいはその上面に展開した遺構埋土に含まれていたものと考えられる。

土師器（第6図：1～26） 土師器の器種には杯A、杯B、杯C、皿A、杯蓋、鉢B、高杯、甕、鍋、鏝釜、移動式竈がある。多くが細片化しているため、器形全体あるいは主要な部分が明らかな個体の中で、5%以上残存率があるものを目安に図化を行った。この中で、供膳具である杯A、杯B、杯C、皿A、杯蓋、碗、高杯、鉢Bは、概ね暗赤褐色～橙褐色を呈する。ただし褐色を呈するものも少量ある。

杯A（1～9）は、平底と斜め上方に開く口縁をもつ。口縁端部はナデにより外側に面をもち（2～9）、このなかには内面側に肥厚するもの（4・7）もある。また単純に収まるもの（1）が1点ある。法量は口径10.4～12.2cm、14.4～16.0cm、19.3～19.6cmの概ね3規格に分かれる。内面に暗文を施すものが多く、なかでも、二段放射状文を施すもの（1～3・5・6）が17点中10点と主体を占める。その他に一段放射状文と連弧文を施すもの（4）が1点、一段放射状文を施すものが1点含まれる。底部にも螺旋暗文を施す個体が多いが、小規格のもの（1・2）には認められない。また暗文を施さないもの（7～9）が5点ある。外面は、暗文を施す個体の底部にはナデ後口縁部にミガキ、もしくはケズリの後にミガキが施されるが、施さない個体にはヨコナデとナデのみである。色調は、調整にかかわらずほぼ暗赤褐色～橙褐色を呈する。ただし、8は褐色、9は橙色で焼成は軟質であり、前者の一群とは異質な印象を受ける。これらは調整の有無が摩滅で不明である。

杯Bは杯Aに高台をもつものである。ここでは高台が付いている底部片が2片あるのみで、



第6图 SD04出土遺物実測图(1)

全体の形状・法量が明らかなものはなかった。いずれも内面に二段あるいは一段放射状文を施し、内1 個体は底部に螺旋文を施す。色調はいずれも暗赤褐色を呈する。

杯C (10・12・13) は杯Aよりやや小さな平底をもち、口縁端部はナデによって内傾する。法量は口径11.2cm、15.9～16.7cmの概ね2 規格あるが、前者は底部がやや尖り気味で器高が高く、後者は器高が低くて杯Aの形態に近いという形態的な小差がある。内面にはいずれも一段の放射状文を施す。外面は口縁部にヨコナデと底部にナデを施すもののみである。胎土はいずれも暗赤褐色～橙褐色を呈する。

皿A (11・14～16) は広い平底を持ち、口縁部が短く立ち上がる。端部は内側に肥厚する。法量は口径12.8cm、16.6cm、20.6～22.0cmの概ね3 規格であるが、12.8cm (11) は杯Aに分類できる可能性がある。内面には一段の放射状文を施すもの (14・15) と施さないもの (16) があり、前者は基本的に底部に螺旋文をもつ。14の底部には観察できないが、摩滅により失われている可能性が高い。連弧文を施すものはない。外面はヨコナデとナデのものと、ヨコナデの後底部にケズリを施すものがある。胎土はいずれも暗赤褐色～橙褐色を呈する。

鉢B (17) は平底と彎曲する長い口縁をもつ。端部は内傾し肥厚する。法量は口径21.6cm、器高6.3cmのもの (17) と、同口径で器高が7.0cmのものがある。いずれも、内面に暗文をもたないが、外面には底部にケズリ後の口縁部にミガキが施されている。胎土はいずれも暗赤褐色を呈する。

高杯は、縦方向のケズリによって面取りする脚部片が1片あるのみで形状は不明である。杯蓋についても同様に、つまみの部分が1片出土しているのみである。

罎釜 (18・19・26) は3点以上ある。18は罎の幅が長く、端部は明瞭な面を作り出さない。胎土には角閃石や雲母を含み茶褐色を呈する。河内産か。19は端部に明瞭な面をもつもので、器壁が厚い。橙色で軟質である。20は大型で、横方向にハケを施すことが特徴である。丸底で短い胴部をもつものとみられる。淡褐色でやや軟質である。

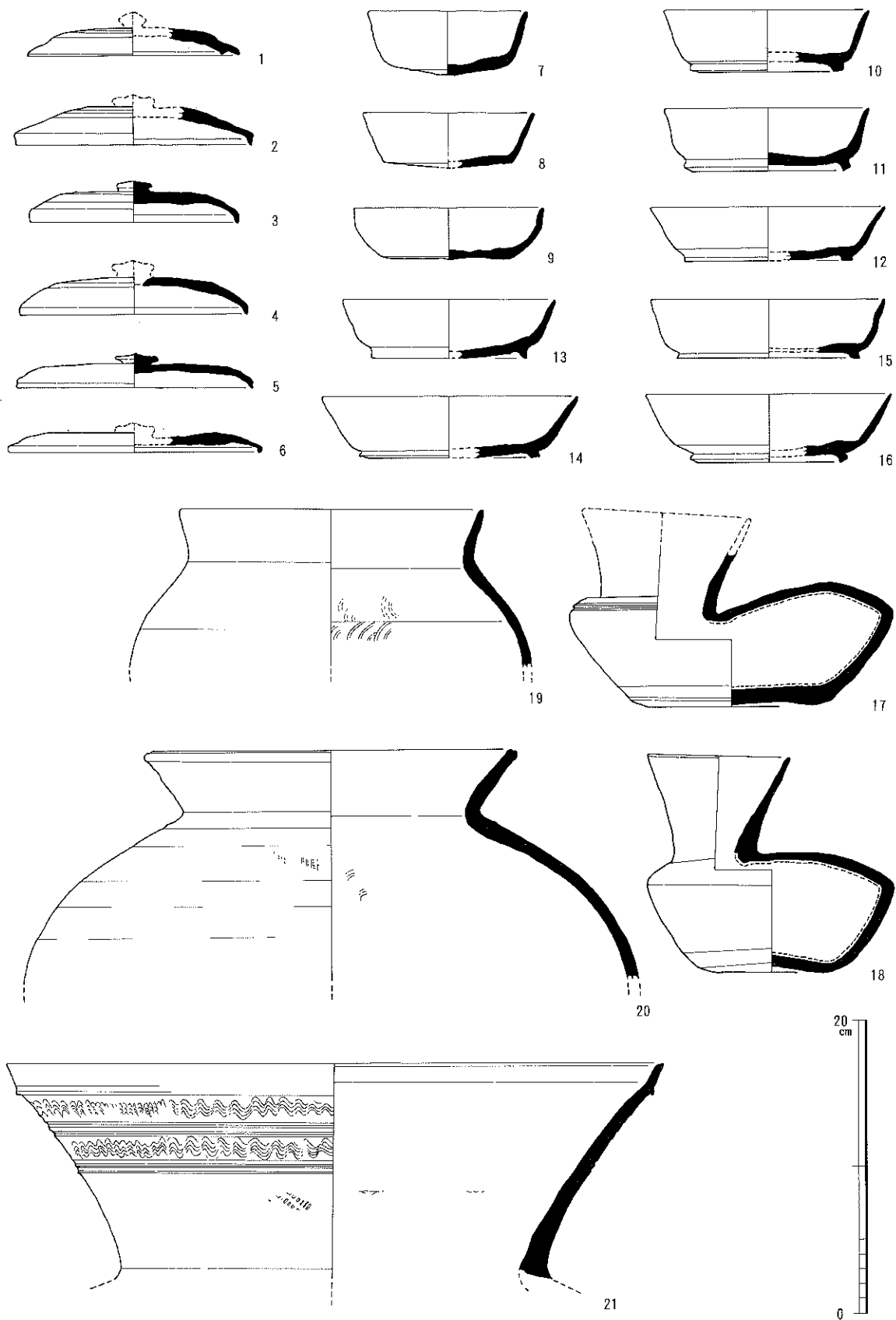
鍋 (20・21) は3点以上あり、口径や全体的な形態、胎土の特徴などが概ね共通している。

甕 (22～25) には、口径と器高比が同程度のもの (23～25) と、器高比が大きい長胴のもの (22) がある。前者には、口径11.0～13.0cm、18.0～24.0cm、31.2cmの大中小規格がある。なお、図示したものの他に把手をもつものもある。

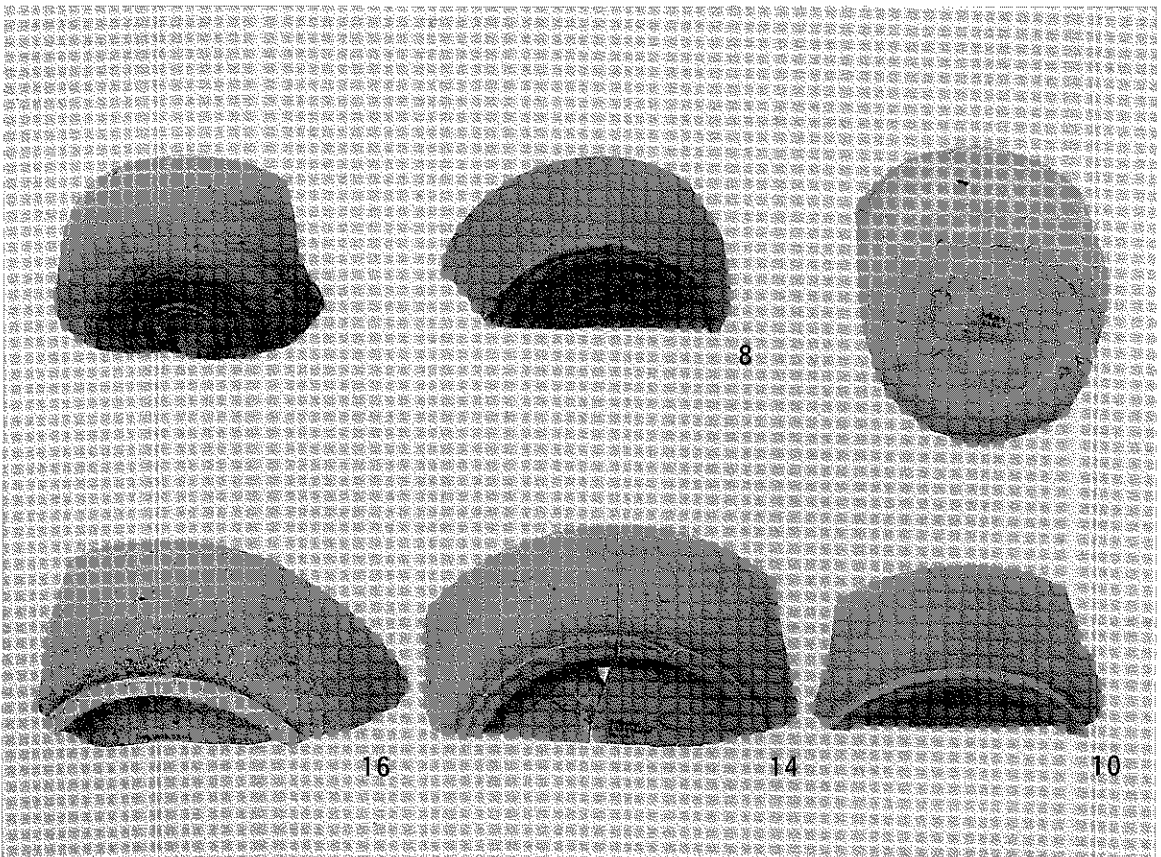
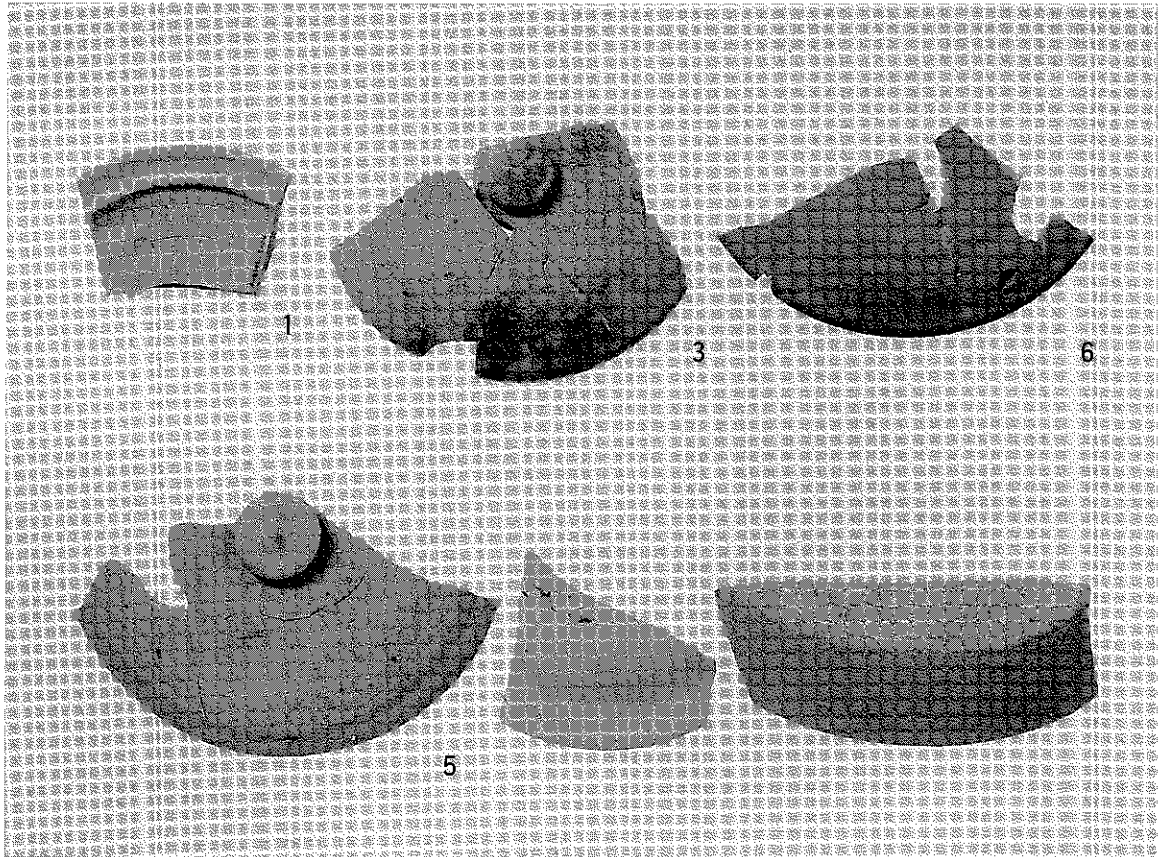
須恵器 (第7～9 図：1～21) 杯A、杯B、杯蓋、皿A、長頸壺、壺、平瓶、鉢、横瓶、甕A、甕Cがある。須恵器は土師器に比べて各個体片が大きい。

杯A (7～9) は10点以上確認できる。これらは、口縁部と底部の屈曲が明瞭でないもの (9) が1点含まれるものの、概ね底部から屈曲をもちつつ直線的に立ち上がる個体で占められる。底部外面はヘラキリのままのもの (8) とヘラキリの後、部分的にナデが施される

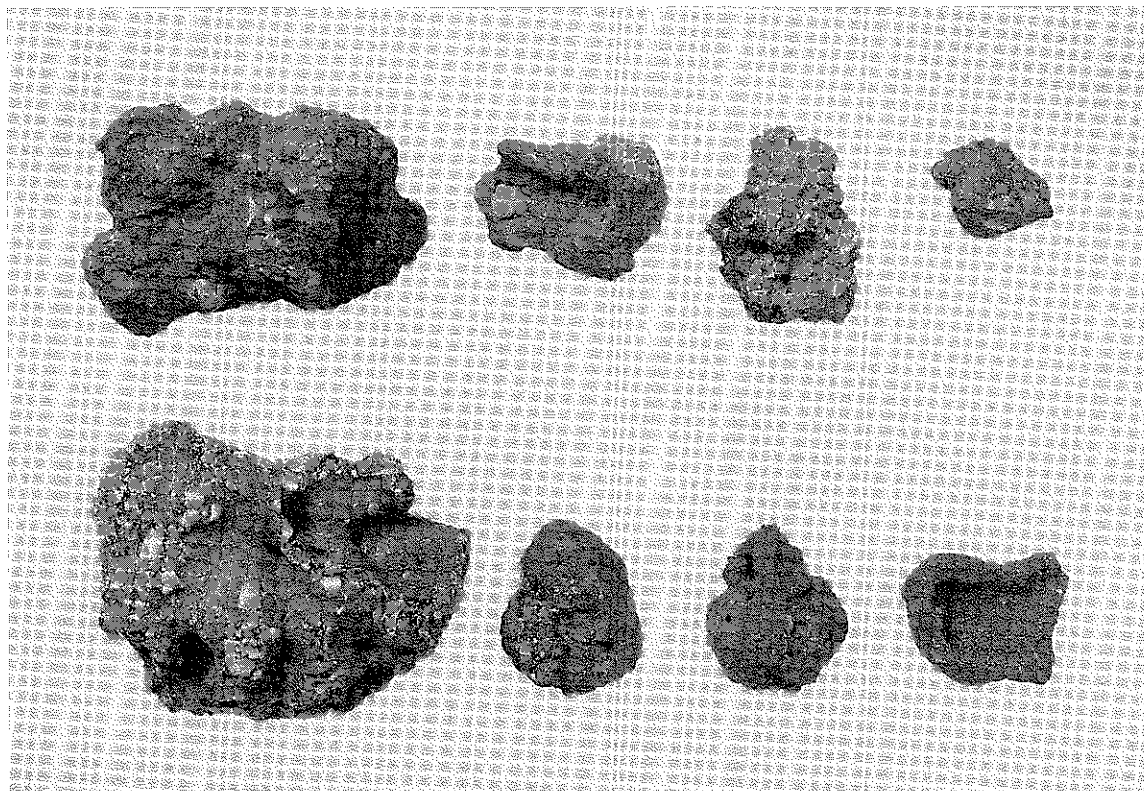
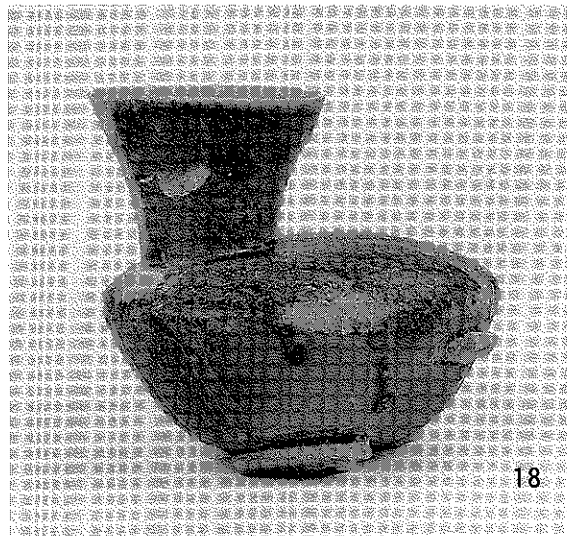
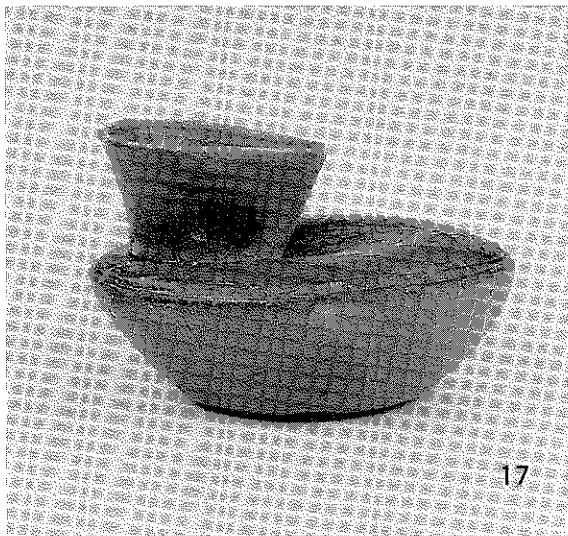




第7图 SD04出土遺物実測图(2)



第 8 图 SD04出土遗物写真 (1)



第9図 SD04出土遺物写真(2)

もの(7・9)とがある。口径は10.6~13.2cmの間で法量分化は明瞭でない。

杯B(10~16)は20点以上確認でき、杯A個体数を倍近く上回る。口径は11.0~12.5cm、14.6~16.4cm、17.0cm以上の概ね3規格があるとみられるが、後2者の差は少ない。高台の形態は、いずれも5mm前後と低いもので占められる。また、底部から口縁部にかけての屈曲はなだらかに立ち上がるものがほとんどである。

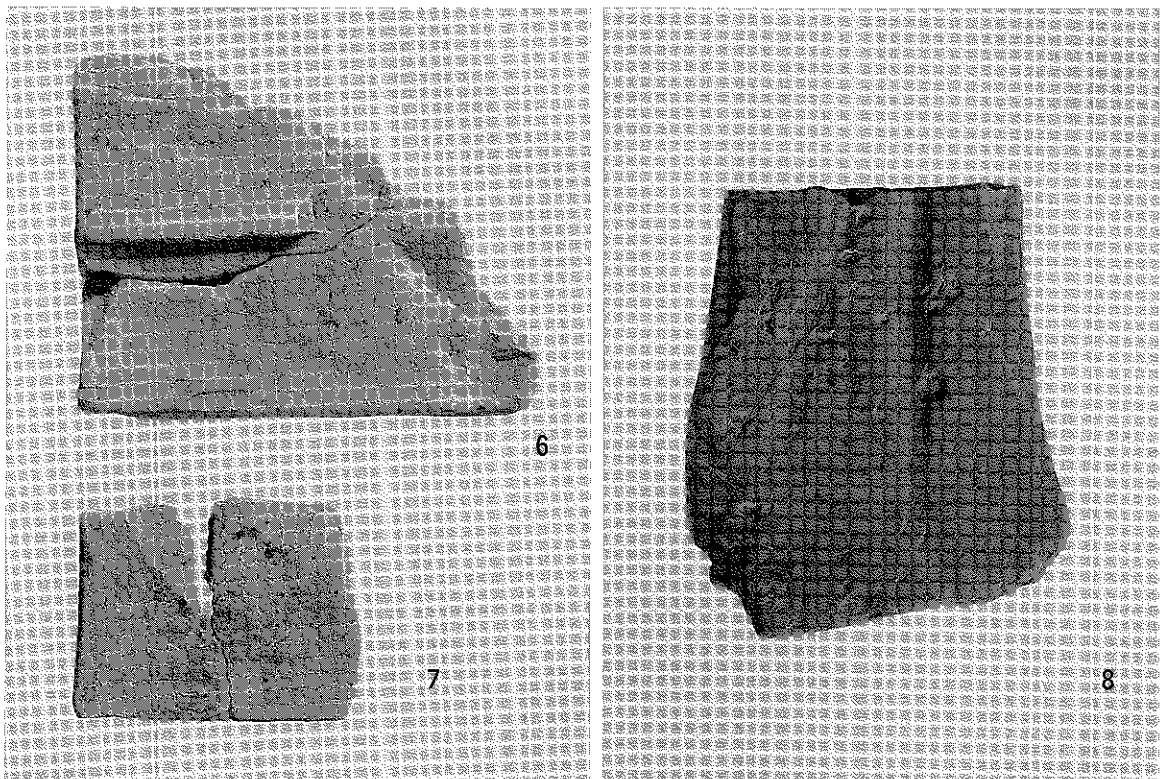
杯蓋(1~6)は、16点のうち15点が天井部から屈曲する短い端部をもつが、1点のみ内面にかえりをもつものがある。いずれも中央のみがやや突出する扁平な宝珠つまみをもつ。

法量の分化は明瞭でなく、口径14.2～17.0cmの幅のなかにある。なお、天井部にはケズリを施すもの（1～4）と施さないもの（5・6）の両者がある。

平瓶2点（17・18）のうち、18はほぼ完形のもので土圧で割れた状態で出土している。いずれも肩部は緩やかに屈曲し、口縁部に向けて天井部がアーチ状に膨らんでいる。また、口径と体部径の比率が17で14：25、18で12：21を測り、口縁部が発達している。

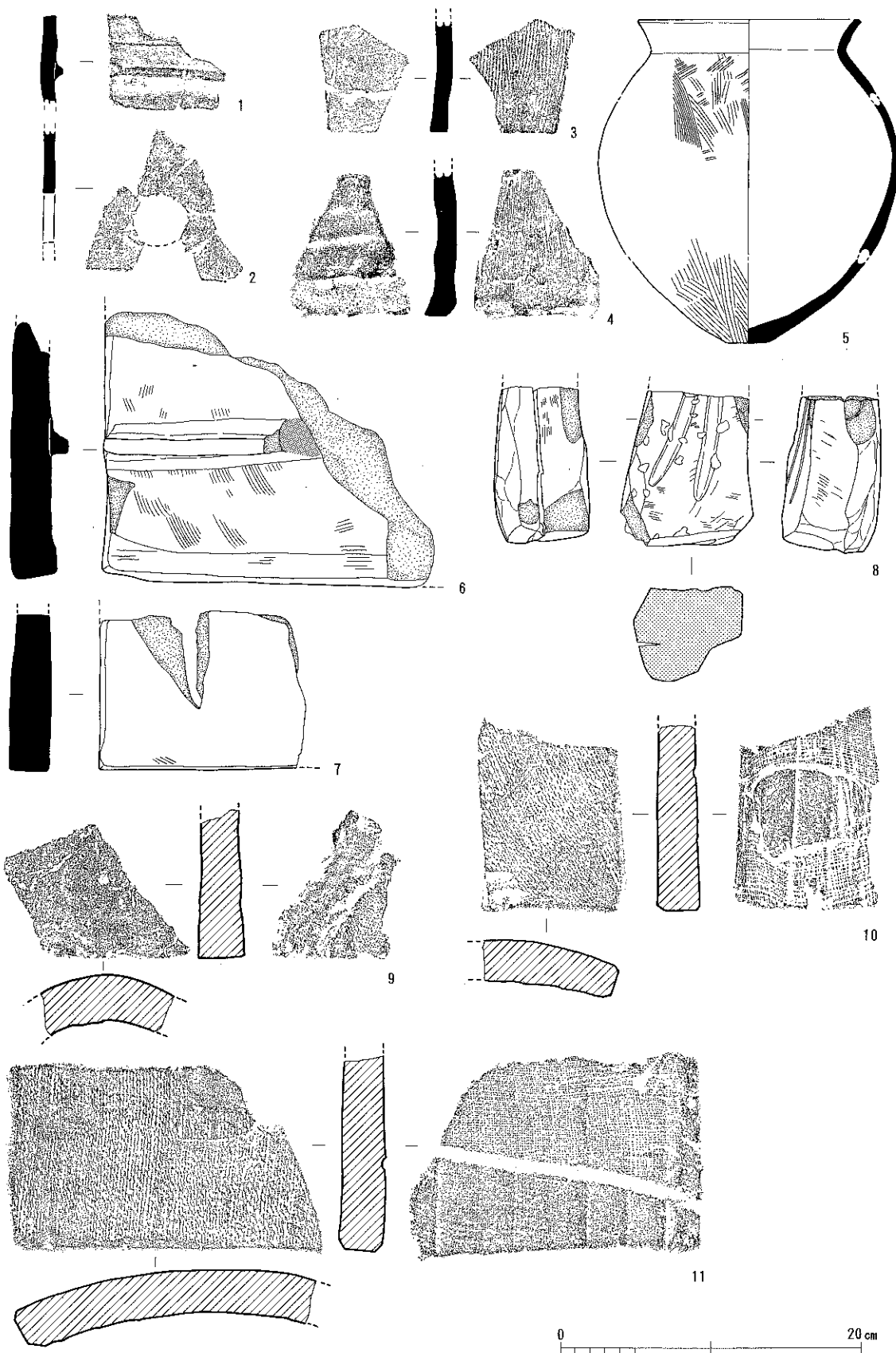
甕（19～21）には、無文のもの（19・20）と有文のもの（21）とがある。19は上端面をもつ単純口縁で、内外面のタタキ痕はナデ消されている。21は口径45cmを測る大型品で、端部下端部を垂下させている点や波状文を施す点が古相を示しており、古墳時代のものであると考えられる。残存率は口縁部の25%程度あり、比較的大きな破片である。

その他の遺物（第9～11図：1～11） 1～4は円筒埴輪である。これらは、いずれも川西氏編年V期<sup>2)</sup>に相当するものである。1～4以外にも、これより小さい破片が10点あるが、全体を復することはできない。胎土や調整の特徴から4個体前後が含まれているものとみられる。1は口縁部片である。端部と最上段突帯間は4cmと短く、突帯幅も端部で0.5cmと狭い。この破片には内外面ともナデのみ認められるが、胎土の似る2の内外面にはタテハケが施されている。3と4は別個体の底部片である。3は小片のため、4は焼き歪みが強いために底部径は復元できない。いずれも外面はタテハケのみで、底部調整は認められない。内面は3がタテハケ、4はナデである。



第10図 SD04出土遺物写真（3）





第11图 SD04出土遺物実測图 (3)

5は小平底をもつタタキ甕である。口縁は単純に外反する。体部外面には粗いタタキの後、縦方向のハケが施されている。内面はナデ。体部最大径が中央よりやや下半にあり、突出しない平底をもつ。弥生時代末から古墳時代初頭に属するものである。口径14.0cm、机上復元高21.7cm。溝内のピットから出土している。

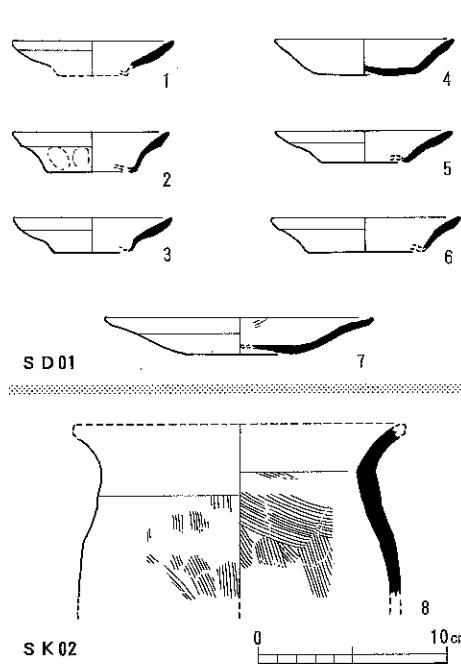
6・7は陶棺の破片と考えられる。6は2辺に端部をもつもので、棺蓋端部中央部分に相当する。北大和・山城地域で出土する陶棺は亀甲形棺が多いが、本陶棺では縦方向のタガが確認できず器壁に彎曲がないことから、どの型式に該当するか不明である。外面にはタテハケ後左上りのナデが、内面には左上りのナデが施されている。7も2辺に端部をもつが部位は不明である。器壁厚と色調が6と酷似するため同一個体である可能性が高い。

8は砥石である。上面に2条の筋があり、玉生産に使用されたものと考えられる。少なくとも全体の30%は欠失している。溝は2条とも幅9～10mmで、長さは7cm以上、深さは最も深い部分で2.2mmと浅い。断面は「U」字状を呈する。下面は上面と平行しておらず、そのまま置いて使用するには安定感に欠ける。

9は丸瓦、10・11は平瓦である。丸瓦は1点のみで凹面に布目をもつ。平瓦は凸面に縄タタキ痕、凹面に布目をもつ。凹面には桶巻づくりの模骨の当たりが認められる。なお平瓦は図示したもの以外に4点あるが、このうちの1点は格子タタキ痕をもつ。

この他、第9図に示した鉄滓がある。総数は18点で、重さは計1.1kgである。直径3～15cm程度のものであり、比重の重いものと軽いものがある。

**b. 溝S D 01出土遺物 (第12図：1～7)**



第12図 出土遺物実測図

土師器皿と陶器があり、整理箱に半箱程度の量がある。陶器体部片が多くを占める。15世紀後半頃に比定できる一群である。土師器皿には、口径平均8.5cmの小(1～3)、10.0cmの中(4～6)、14.0cmの大(7)の3規格に分類できる。これらは、規格に関わらず、すべて褐色を呈するものである。陶器には大型の甕があり、信楽産のものとみられる。

**c. 土壇S K 02出土遺物 (第12図：8)**

土師器皿、甕が少量ある。土師器皿は15世紀後半頃のもので、S D 01と同様である。甕(8)は奈良時代。

**d. 包含層出土遺物**

土師器皿・瓦器皿と陶磁器等が整理箱に1箱程度ある。一部が鎌倉時代、大半は室町時代に該当する。



e. SD04出土土器について

今回の調査で出土したSD04遺物の詳細については前項で述べたとおりである。その中でも、良好な資料が得られた飛鳥から奈良時代にかけての土器の特徴について、整理しておきたい。

**土師器・須恵器の特徴** 土器群の編年上の位置付けについて検討したい。まず、土師器杯Aが二段放射状文をもつものでほぼ占められること、また同器種における調整手法には口縁部をヨコナデした後、底部にナデもしくはヘラケズリが用られる特徴などから、本遺構の土器群は概ね平城京編年におけるI期の土器群<sup>3)</sup>と特徴を同じくしているといえる。他の杯・皿類についても、その前後の型式を少量含むものの、大きく逸脱する個体は認められない。須恵器についても同様である。

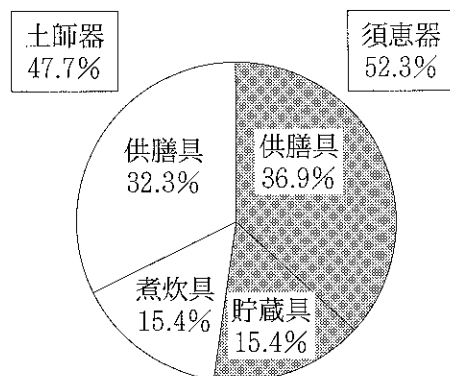
次に、土師器供膳具は、概ね暗赤褐色～暗橙褐色を呈する胎土をもつもので占められている。濃い赤褐色に発色し、良く焼き締まっていることが特徴で、器面が摩滅している個体は少ない。これらは、平城宮・京域内で出土する土師器I群とされている一群とは異なるもので、II群とされる一群とも必ずしも一致しない。また、I群とされている淡褐色を呈する個体はほぼ認められない。このように、当集落の土師器供膳具は、平城宮・京域とは供給源が異なっている可能性が高い。また、明らかにいずれとも異なる褐色の胎土をもつものが少量含まれている。

宇治市内では、久世郡域では広野廃寺<sup>4)</sup>、旦棕遺跡<sup>5)</sup>、宇治郡域では菟道遺跡<sup>6)</sup>、西浦遺跡<sup>7)</sup>などで奈良時代前半ごろの資料が得られているが、いずれも本遺跡と類似する胎土をもつものが多くを占める傾向にある。このような状況からは当集落を含め、宇治・久世郡の宇治郷近辺に主に供給した生産集団が存在した可能性が指摘できよう。

また、少量ながらも異なる胎土を持つ供膳具があること、煮炊具の胎土にはかなりバリエーションが認められることなどからは、複数の土師器生産者が供給を行っていたと想定することができる。

須恵器については、明瞭な特徴に基づいて胎土分類を行うことはできなかったが、明らかに畿外での生産

土 師 器		須 恵 器	
杯 A	17	杯 A	10
杯 B	2	杯 B	20
杯 C	11	杯 蓋	16
皿 A	7	皿 A	2
杯皿蓋	1	壺	長頸 2
鉢 B	3		不明 5
高 杯	1		蓋 1
甕	13	平 瓶	2
鍋	3	横 瓶	1
罎 釜	3	甕	A 6
竈	1		C 1
計	62	鉢 A	2
		計	68



第13図 SD04土器の個体数と比率

地の特徴を示すような胎土を持つ個体は認められなかった。器種の構成においては、貯蔵具の器種、特に壺類が少ない点は指摘できる。また、焼き歪みが強く、使用に耐えられないのではないかとみられる個体を数点含んでいる。

**個体数の比率** 奈良時代には、遺跡の性格によって土器の器種や比率に相違があることは既に指摘されているとおりである。本遺構についても各器種の個体数と比率をまとめておきたい。

S D04での土師器と須恵器の比率については第13図に示したとおりで、土師器47.7%、須恵器52.3%と須恵器が若干上回るものの両者は同率に近い割合である。また、全体の中で供膳具が占める割合は69.2%である。

本遺構における土師器と須恵器の相対比は、全く同率ではないものの平城京左京四条四坊九坪S K2412、同左京六条三坊十坪S D01など平城京域内で広く認められる割合<sup>8)</sup>に近い。また、供膳具が70%前後を占めることも類似する。このような土器比率は、宇治・久世両郡における、より一般的な様相としてとらえることが可能ではないかと推測される。今後の資料の増加を待って検討を深めたい。

## 5. まとめ

今回の調査では、検出した溝S D04が前方後円墳か否かを確定できなかったが、前方後円墳であった場合、古墳群の範囲が従来の想定より大きく広がることになる。そうすると木幡古墳群全体の評価を検討し直す必要が生じよう。

また、飛鳥・奈良時代の遺物には、鍛冶や玉生産など手工業生産に関わるものや瓦・水滴など官衙や寺院との関連を思わせるものがある。これらの遺物から考えると、官衙や寺院に付設された工房のようなものが想定できるのではないか。今回の調査ではこうした施設や建物の遺構は検出していないが、このような施設の縁辺部にあたるものと思われる。

足利健亮氏は『宇治市史』の中で奈良時代の古道を、調査地の西を六地藏に通ずる旧道にあてたが、許波多神社以北は堂ノ川と山科川の氾濫原となり、道路に適するとは思えない。むしろ調査地南側の東西路を通り、浄妙寺の西を通るいわゆる三十番神街道の方が古代の道路としては適当ではないかと考える。この場合古道の屈折点に木幡神社遺跡が所在している点が重要なポイントであると考えられる。

## Ⅱ. 妙見古墓・妙見遺跡発掘調査概要

(菟道妙見9-2 他)

### 1. はじめに

本報告は、菟道妙見9-2他18筆における三室戸友ヶ丘宅地造成工事に先立って実施した妙見古墓（妙見遺跡）の発掘調査概要である。

妙見古墓（妙見遺跡）は、この調査で発見した遺跡で、宇治橋から直線距離で約800m北東、標高40～75mの低丘陵上に位置する。妙見古墓の位置する丘陵は、醍醐・笠取山地から派生する山稜の末端にあたり、市街地に近い緑地として、また宇治橋周辺地区を東岸市街地から隔離する景観緩衝帯としての役割を果たしている。丘陵周辺は、市内でも遺跡集中度が高い地域である。特に近接する低丘陵上には観音山古墳・二子山古墳<sup>1)</sup>・池山古墳などの前中期古墳や池山瓦窯<sup>2)</sup>・山本須恵器窯・山本瓦窯<sup>3)</sup>などの窯跡群が存在し、平地に展開する菟道遺跡<sup>4)</sup>は古代宇治郡宇治郷の中心的集落であったと考えられる。

今回、開発対象地域となった丘陵にも、周辺域と関係する遺跡が埋蔵される可能性が強いと予測されたため、事業者である住友商事株式会社と事前協議を行い、工事に先行して試掘調査を実施することとなった。この結果、白鳳時代平瓦の包含を確認したため、継続して発掘調査を行うことで合意した。調査期間は平成10年4月30日から同年7月31日までで、調査面積は計850㎡である。調査にあたっては菟道自治会・明星町町内会にご理解とご協力を、菟道自治会長藤井和雄氏からは有益なご教示をいただいた。感謝したい。



第14図 調査地遠景（三室戸小学校屋上より撮影、東から）

## 2. 試掘調査の概要

今回の調査地は、池山・山本丘陵に挟まれた妙見丘陵上に位置している。妙見丘陵は東側の裾部を昭和40年代の開発で削平されているものの、概ね旧地形をとどめていた。

調査地の現状は、丘陵先端付近は竹林で、これより南は照葉樹林に覆われる雑木林となっていた。しかし、丘陵一帯はかつて茶畑として利用されていたらしく、土留石垣や茶木などが随所に認められた。これらが放棄されて現況へと植生が変化したのは、昭和40年代以降のことらしい。この他にも、昭和のものと考えられる石垣や籬壇状の造成、溜め池、排水溝、土取穴などが随所に見られた。また調査地南側の平坦地（G7～9付近）では、近辺の造成工事残土により谷が埋められ、関西電力高圧線周囲では排水溝が掘削されているなどの地形改変が見られた。

開発範囲は、丘陵の先端部を除く31,786㎡であり、ほぼ全域で切り土による造成が行われる予定であった。そのため試掘調査を丘陵頂部隆起・丘陵斜面部に設定したトレンチ3カ所と1㎡グリッド30カ所において、遺構・遺物の包蔵状況の確認を行うこととした。

**グリッド** G1～30が当初に設定したグリッドである。前述のとおり、古瓦が出土したため付近でG31～58のグリッドを追加し、遺構の兆候が全く認められないグリッドの付近では掘削を省いた箇所がある。最終的には48ヶ所で掘削を行った。層序は、現代攪乱及びG29・50で流土下に山砂の堆積が見られたほかは、すべての地点で茶褐色表土・褐色粘質土の斜面流土・黄褐色粘質土地山の順に堆積があり、流土堆積は各地点で0.3～1.1mの間であった。

掘削は北寄りに設定したグリッド群から開始した。G28での調査着手後、直ちに流土中に包蔵された飛鳥後期の格子タタキ平瓦を検出した。そこで、周囲に15カ所のグリッド（G31～34・36・38～40・42～46・50）を追加し、G28についてはBトレンチとして拡張することとした。その結果、G31で同様の平瓦を、G26では須恵器片を検出したほか、Bトレンチではさらに平瓦5点を検出した。そのため、この周辺に遺構が存在する可能性が高いと判断し、事業者と発掘調査への移行を協議した。

G23・25では、中・近世土師皿片を流土中に検出したため、ここでも周囲にグリッドを6ヶ所（G48・49・51・52・57・58）追加した。また、先の地点との中間となる地点にもグリッドを4カ所（G53～56）追加した。その結果、G49・51～56で細片化した中近世土師器・陶器・瓦器・輸入銭などを検出したが、いずれも細片で摩滅が著しかったため、2次の移動を受けた遺物と考えた。さらに南側のグリッドでは、G2より南、G56より東のグリッドでは遺物・遺構ともに確認されなかったため、周辺での試掘を終了した。

**トレンチ** Bトレンチを除く、A・C各トレンチでは、表土・褐色流土下で黄褐色粘質土の地山を検出したが、遺構・遺物ともに確認できなかった。



第15図 グリッド・トレンチ位置図 (一点破線が開発予定区域)

### 3. 発掘調査の経過

試掘調査の結果を踏まえ、飛鳥後期平瓦出土地点を中心とした範囲に調査区を設定した。調査区の地形は比較的急勾配の南西斜面である。現地は、重機などの機械によるものとみられる土取りによって大きく丘陵裾が抉られていたほか、斜面中に直径約8～4mの土取り穴や攪乱2ヶ所、調査区の東側の一部に茶畑の籬壇造成などの地形改変を受けている様子が観察できた。

飛鳥後期の平瓦の存在と現地が斜面地であることから、登窯など瓦生産に関する遺構を想定して調査に着手したが、結果として関係遺構は検出できず、瓦については、調査地近隣から移動した2次的遺物であると判断した。しかし、奈良時代古墓が確認されたことにより、当地が8世紀代には墓域として利用されていたことが明らかとなった。

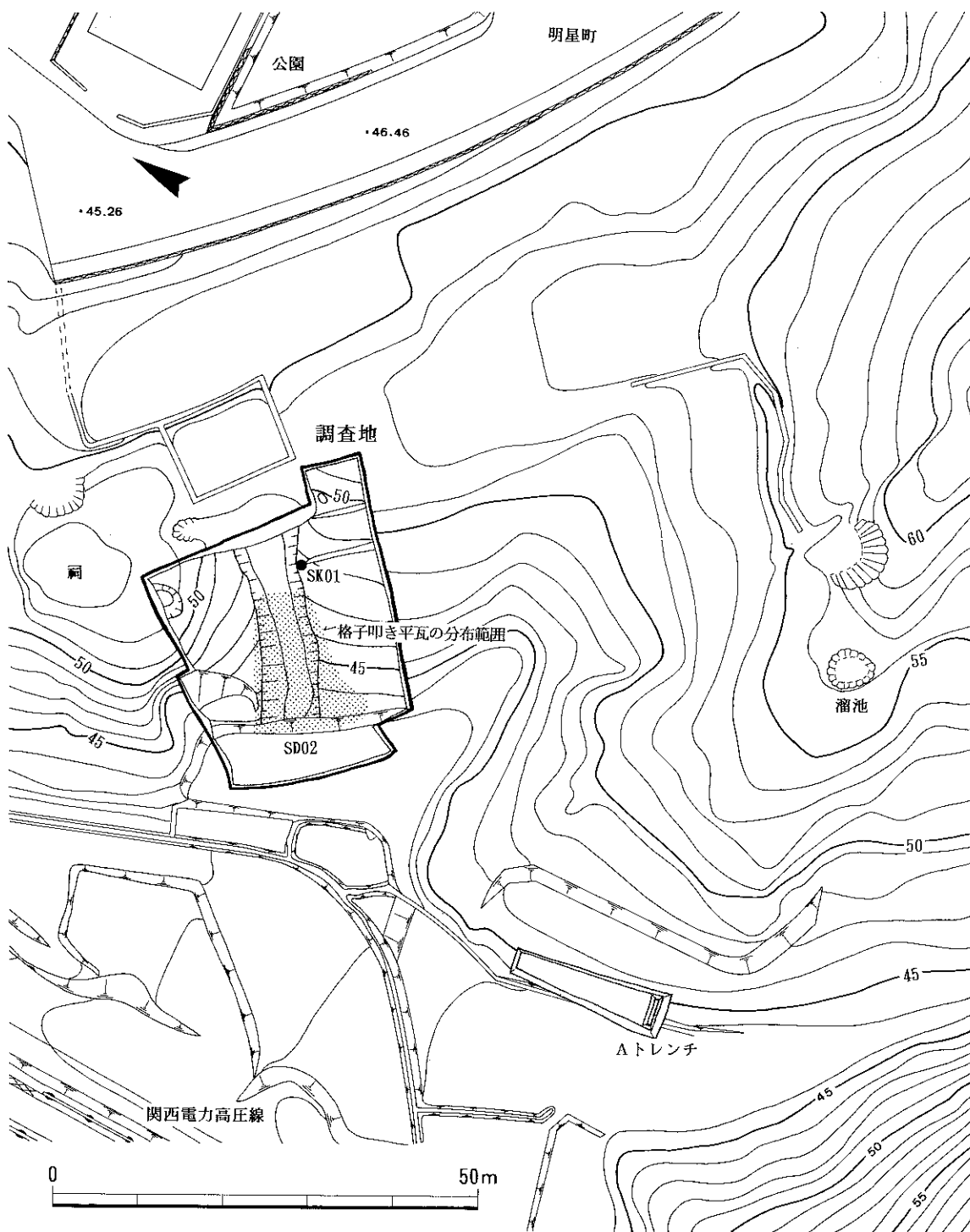
調査区内及び周辺の竹林伐採後、平成10年6月10日から調査を開始した。作業は、表土・竹根の除去後、人力掘削と精査を実施した。範囲内で、瓦は尾根に直行する溝に流れ込んで包含されていたこと、奈良時代古墓の1基の概要を確認できた。

調査終盤の7月16日には現地説明会を開催し、地元の方々を初めとする100名近くの参加者を得た。この後、写真撮影・測量などによる記録作成を完了し、7月31日に調査を終了した。調査面積は750㎡である。



第16図 調査地全景（南から）

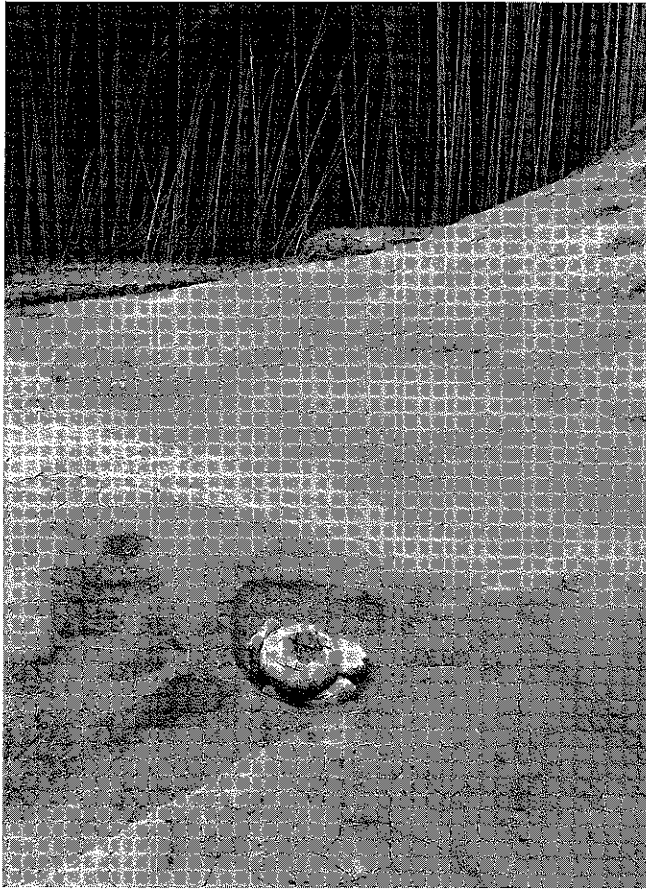




第17図 調査地位置図

#### 4. 検出遺構

層序 調査区内の基本的層序は上層より竹根を含む腐植土、竹林以前の表土、褐色粘質土流土、黄褐色粘質土の地山である。調査区東部分にはかつての茶畑耕作土の残存が、尾根頂部に当たる調査区北部分には地山の一部として砂層が存在するなどの部分的差異があった。旧表土には近現代瓦および少量の中世平瓦片・中近世土器が含まれていた。



第18図 SK01の検出状況（東から）

古墓SK01 骨蔵器をおさめた墳墓を一基検出した。検出地点は溝SD02の肩口付近で、尾根頂部から西に18mほど下った傾斜面上であった。直上を近現代茶畑畝溝が横断しており、畝溝掘削中に須恵器壺を検出したことで発見に至った。

骨蔵器は、地山上に浅い皿状の土壇を掘り込み、添え石をして納められていた。土壇は0.36×0.45mの平面楕円形で、底部は谷側に向かって緩く山側に向かって急傾斜を持っており、斜面地に平坦面を作り出す要領で掘り込まれている。深さは地山面より約0.25mである。土壇の深さと壺の高さがほぼ一致しており、遺構上面は削平を受けている可能性が高い。そのため、上部

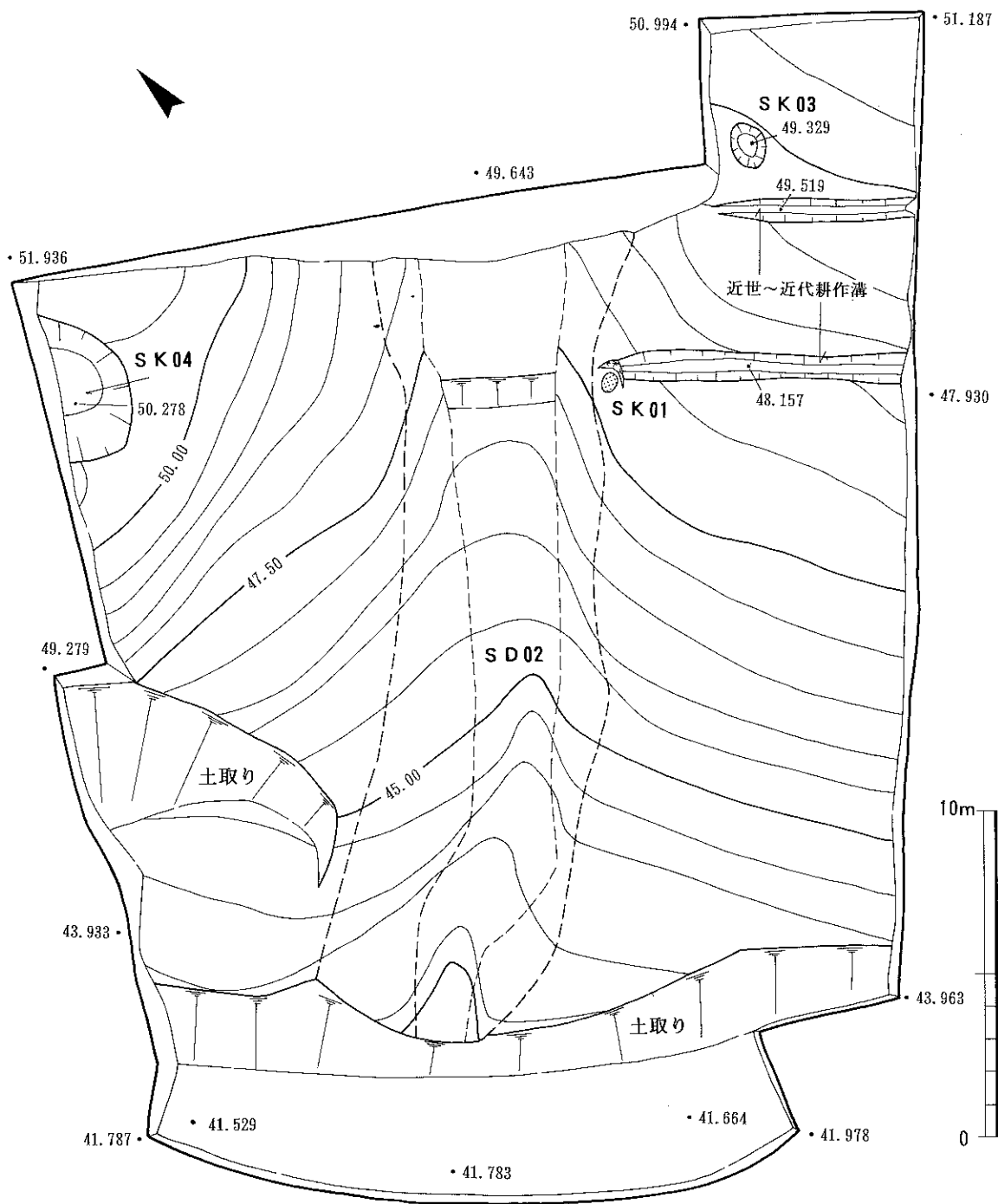
構造の有無は不明である。なお、これに伴うと判断できる石材等の出土はなかった。

土壇埋土には遺物は全く含まれていなかった。焼土や炭なども確認できなかった。土壇内壁の焼成痕跡なども観察できなかった。これ以外には調査区内に焼土や焼成痕跡が存在しなかったため、茶畑そのものは古墓から比較的離れた地点で行われたとみられる。

壺は土壇が一番深くなる山側に寄せて据えられていた。添え石は拳大から掌ほどの大きさで全部で6石であった。2石を土壇底に置き、壺を設置した後に、谷側に4石が添えられていた。4石のうちの3石は、土壇の法面に沿って壺底に斜めに差し込まれるように据えられていたが、1石のみは壺に立て掛けるように据えられていた。これらは、谷へ壺が転落するのを防ぐ措置と考えられる。

壺の内部には、土圧によって割れた蓋の一部と土が流入していたものの、ほぼ完存状態であった。内部には細片化した火葬骨がつまっていた。墓誌等の副葬品はなかった。

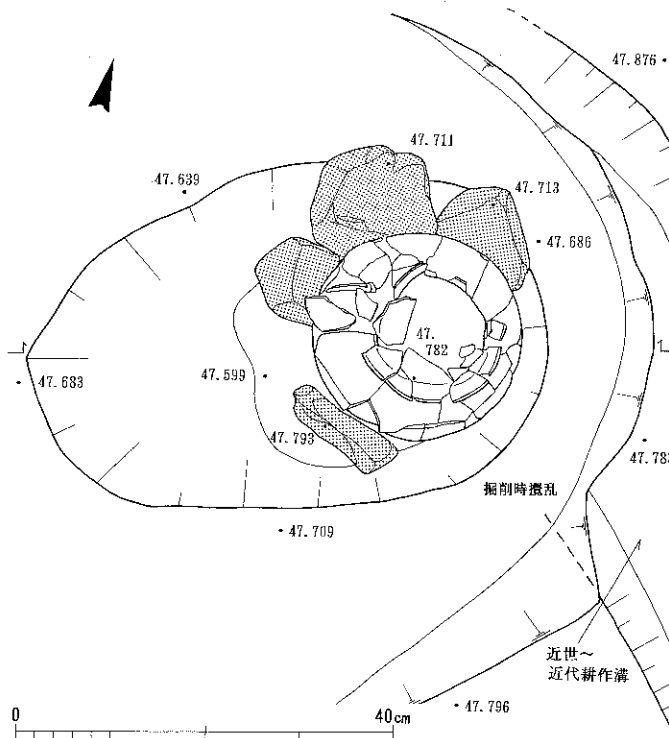
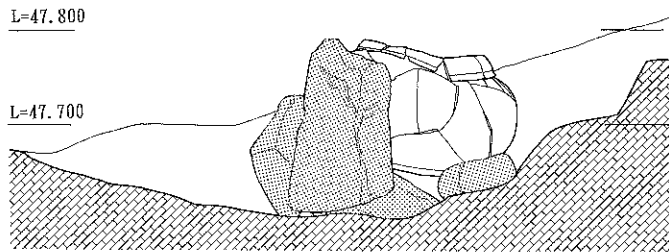
溝SD02 丘陵先端部と尾根筋を分断するように丘陵に直行する溝である。幅6 m、深さ平均0.9mと断面U字状で比較的規模が大きい。溝自体は地山上で検出している。溝内埋土は上層より近現代表土・中世土器片を含む茶褐色土・褐色粘質土であるが、ほぼ褐色粘質土で埋没している。この褐色粘質土には、飛鳥時代後期の平瓦12点・奈良時代須恵器片が整理



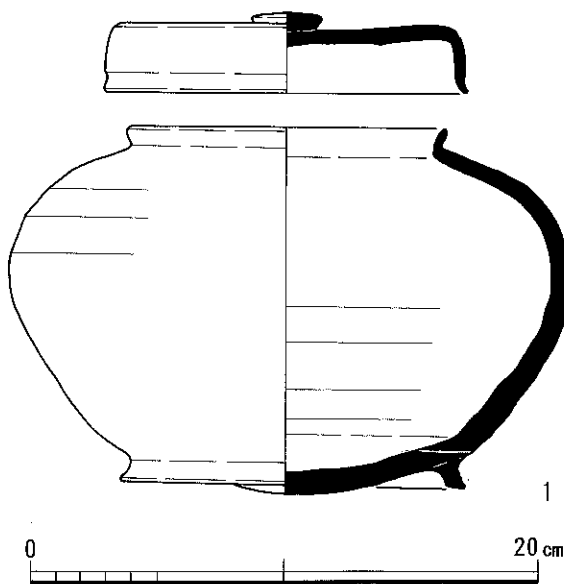
第19図 調査区実測図

箱に3分の1ほどの量が含まれていた。瓦・須恵器については溝の底部上で検出したものは少ない。この溝に直接廃棄されたものではなく、褐色粘質土とともに流入した可能性が高い。性格については不明である。

土壌SK03 出土遺物はないが、埋土が現代表土と同じため茶畑時の土壌と判断できる。



第20図 SK01実測図



第21図 SK01出土土器

土壌S K04 S K03同様遺物の出土はないが、埋土の状況から近現代土壌と判断できる。

### 5. 出土遺物

#### 飛鳥時代の遺物 (第23図: 2~6)

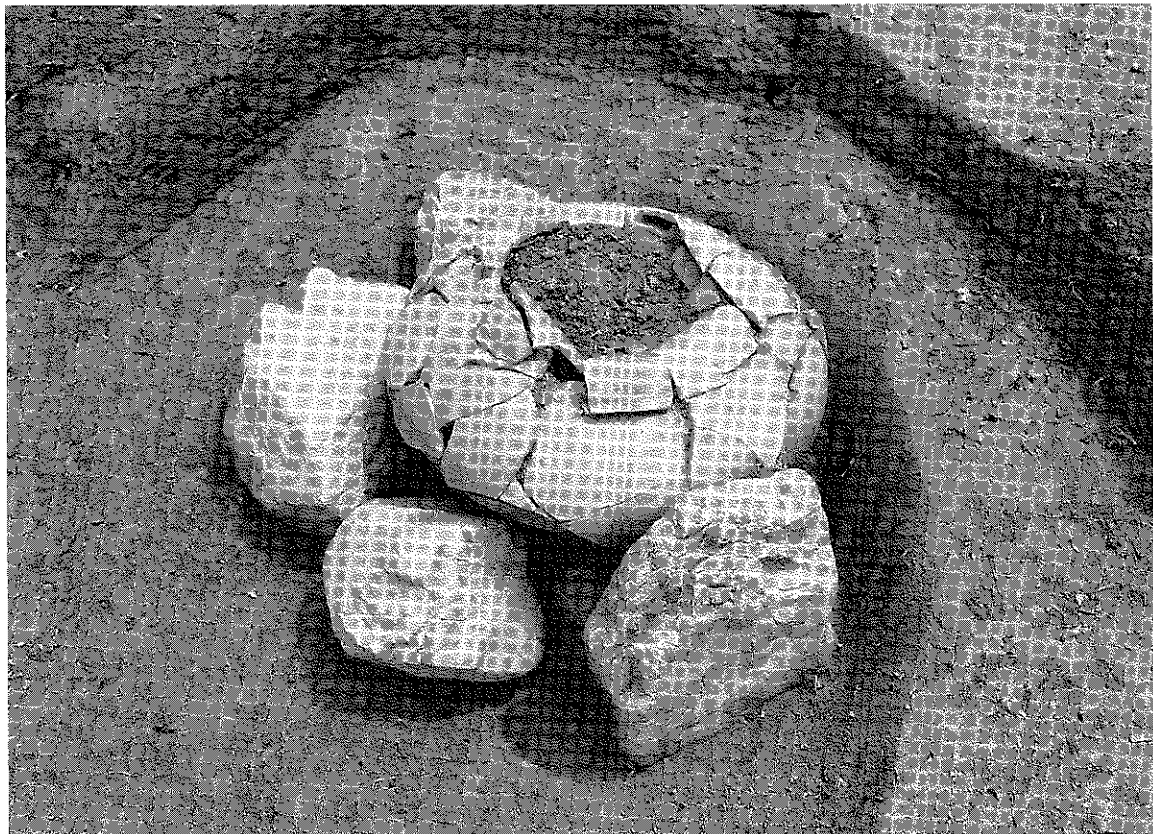
平瓦が19点ある。7世紀後半期のものと考えられる。すべて凸面は格子叩き目で、凹面に当布痕を残す。また、桶巻きづくりで製作されているため、凹面に模骨痕が観察できる。端部にはヘラケズリが施されている。6は広端部外面のタタキをナデで消しているのが特徴的である。焼成はいずれも硬質で、青灰色を呈するものが多い。

#### 奈良時代の遺物 (第21図: 1)

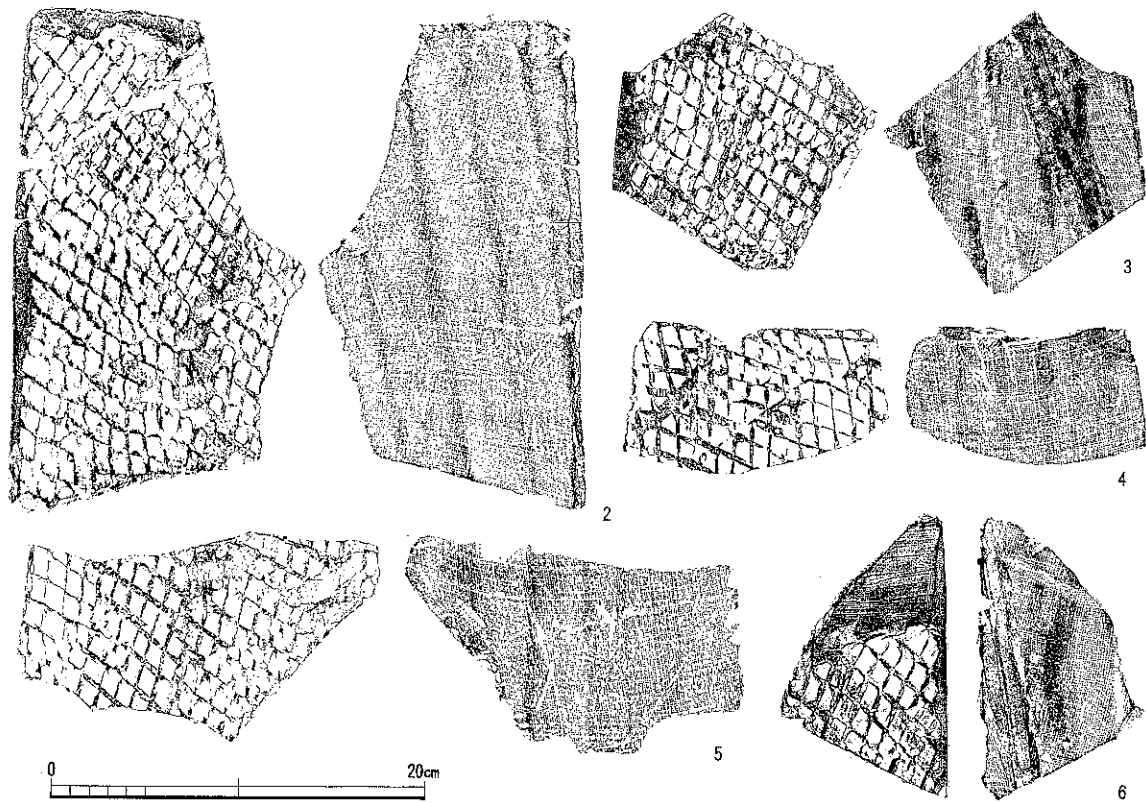
古墓S K01の骨蔵器として用いられた須恵器壺が1点ある。1は有蓋の短頸壺である。口径12.5cm、器高14.3cm。壺口縁は外反気味に短く単純に収める。高台を持つが、壺底部が高台よりも突出している。内外面ともナデ調整。蓋は、大ぶりで扁平な宝珠つまみをもち、口縁端部は強くなでられてやや外反する。上面にはヘラケズリが施されている。8世紀前半代のものと考えられる。

この他に、溝S D02埋土中の須恵器片が少量ある。これらは杯蓋・壺・甕片で8世紀代のものである。

中近世の遺物 土師器・須恵器・陶器・北宋銭・平瓦がある。平瓦は表面に離れ砂をもち中世のものと考えられる。いずれも細片化が著しい。



第22図 骨蔵器検出状況（南から）



第23図 出土平瓦拓本

## 6. まとめ

前章までに調査成果の概要についての報告を行った。ここでは、これら成果の再整理を行い、まとめとしたい。まず、妙見古墓の特徴をまとめておくと、

- ①古墓は須恵器短頸壺を火葬骨の骨蔵器として使用すること。
- ②副葬品を伴わないこと。
- ③埋土内に炭や灰などを含まないこと。
- ④単独墓であること。
- ⑤骨蔵器埋納土壌の年代は、壺の形態から8世紀前半代と考えられること。

という点があげられる。そもそも火葬墓は、8世紀初頭以来、天皇を含む官人層が採用した葬送であるとされる。墓誌や副葬品をもたない妙見古墓は簡素な墓のように思われるが、平城京周辺で検出される古墓群においても、8世紀前半期を下ると副葬品をもつ墓は少ない傾向にある。これを踏まえれば、一概に簡素という判断を下すことはできない。

他方、立地や存在形態を他例と比較する視点から妙見古墓の内容を見れば、山稜斜面を選地していること、短頸壺に葬ること、単独墓であることは、むしろ京域周辺の墓の例に比較的近い要素を備えているとみてよい。また、8世紀前半という日本における火葬導入期に近い段階で葬送の転換を図っていることから、被葬者が朝廷に出仕するような、その範を得易い立場にあった人物であるとみられる。また、都から離れて埋葬されていることから付近出自の地方豪族層出身者と考えてよいであろう。

妙見古墓の被葬者の出自については、古墓の北西約500mに位置し、同時代に機能した集落、菟道遺跡を想定することができる。また、8世紀後半以降、10世紀前半頃まで規模を縮小しつつも存続した遺跡の状況を見れば、妙見古墓以外にも古墓が営まれた可能性があることも推測される。

なお、宇治市内では、現在のところ本例を含めて8～10世紀の墳墓が5例が確認されている。<sup>6)</sup>このうち、8世紀代のものとみられる例は4例である。いずれも、火葬に伴う墓であること以外はそれぞれ異なる埋葬方法を採用している状況にあるが、集落外の山稜斜面を選地している点については一致している。類例の増加を待ちたい。

飛鳥後期平瓦の出土については、瓦窯や仏堂など直接的に伴う遺構は確認することができなかったが、瓦表面の摩滅は少ないことから長距離の移動は考えがたい。当地は、直近には、川原寺式大鳳寺創建使用瓦を焼成した山本瓦窯<sup>6)</sup>が存在するなど、一帯が窯業生産地域であったこともあり、未発見の瓦窯や集積地などが周囲に存在する可能性を考える必要がある。現在までの踏査では、灰原の痕跡などを周囲に観察することはできないものの、古墓の存在も含めて、今後周辺丘陵での地形改変時には十分な留意が必要である。



### Ⅲ. 菟道遺跡発掘調査概要

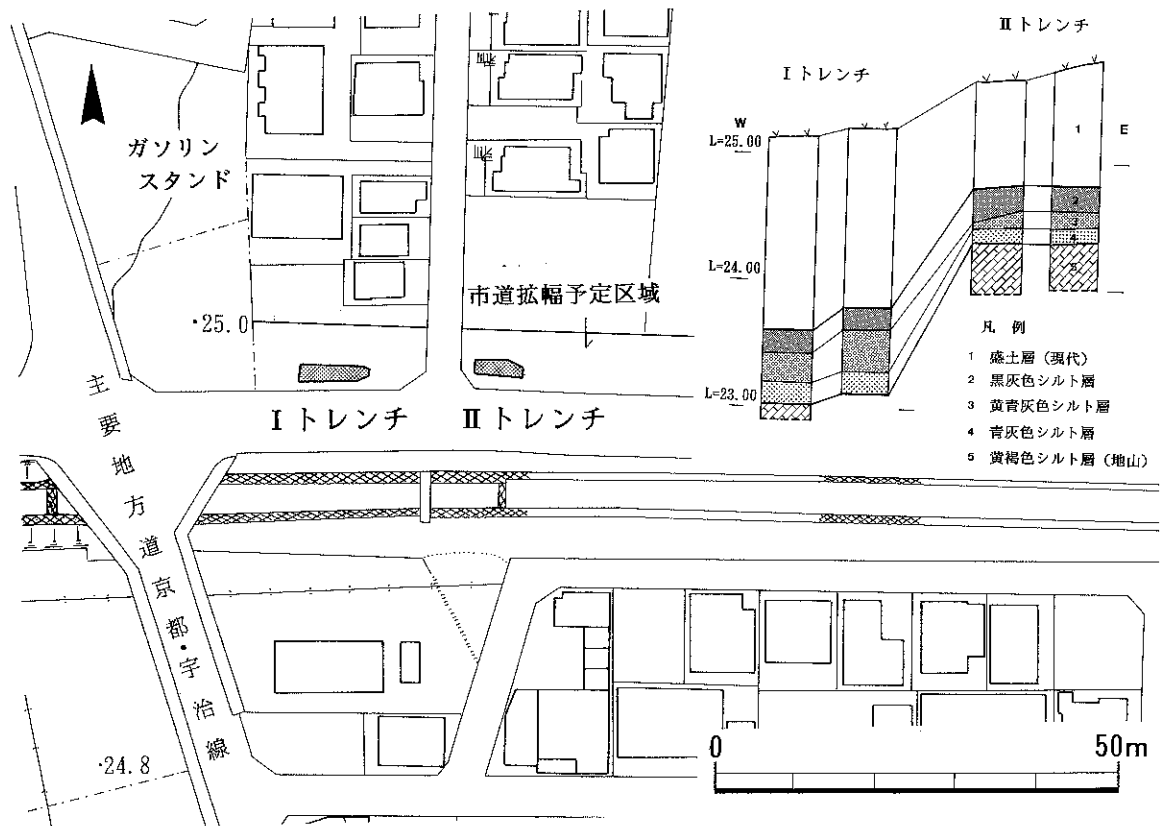
(菟道谷下り36-1、25-1地内)

#### 1. はじめに

本報告は、菟道谷下り36-1、25-1地内における市道明星線拡幅工事に先だって実施した、菟道遺跡発掘調査概要である。

菟道遺跡は宇治橋北東約400mの付近を中心とした複合遺跡である。過去に6回以上の調査を重ねており、古墳時代から中世に至る各時代の遺構が累積している状況を把握している。特に平成6年度の門ノ前地区の調査では前方後円墳を1基、平成7年度谷下り地区での調査では古墳時代竪穴住居群・奈良時代掘立柱建物群や後期古墳群を検出し、市内の中でも高い密度で遺構が展開していることが判明した。<sup>1)</sup> また、主要な古墳がこの周囲一帯の丘陵上に連綿として築造されていることや、7世紀には大鳳寺が建立されていること<sup>2)</sup> などからは、菟道遺跡が古代宇治の中心集落として栄えていた様子が窺える。

今回の調査地は、市道明星線と府道京都・宇治線との交差点より20～50m北東に当たる地点である。標高25.0m前後で、拡幅に伴って既設家屋の移動が完了し更地の状態であった。調査は平成10年11月24日から同年11月30日まで行い、調査面積は20㎡である。



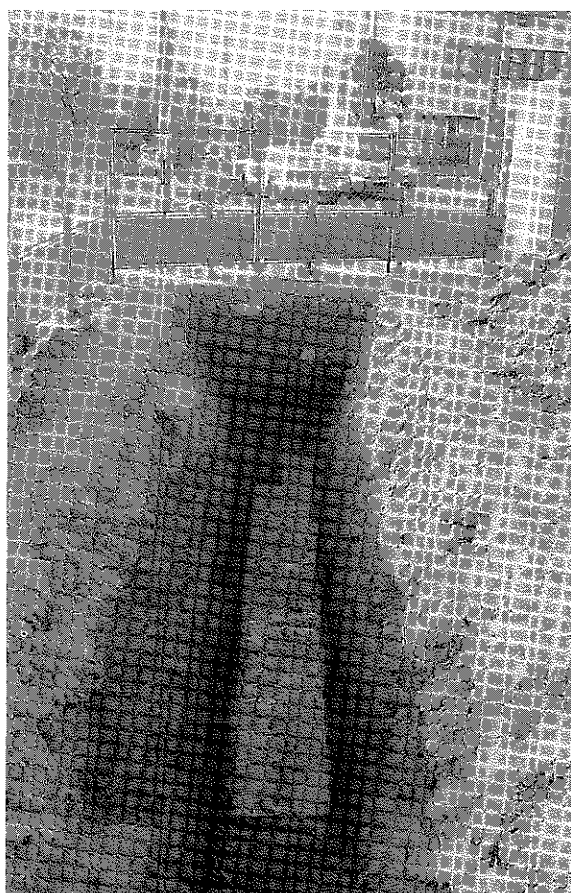
第24図 調査地の位置と層序

## 2. 調査の概要

今回の調査対象範囲内中央には里道の横断があったため、トレンチを2か所に分けて西側を1トレンチ、東側を2トレンチとした。調査は、重機掘削後、遺構面で人力精査を行った。その結果、遺構の検出はなく、調査地点はかつては急な角度をもつ段丘斜面であり、近現代の埋め立てによって平地化していたことが分かった。

調査地の基本層序は、上層より現代表土、3層の水田層、黄褐色シルト層の地山の順であった。現代表土は主要地方道京都・宇治線敷設時のものとみられ、西端では1.6m、東端では0.8mの厚さがあった。黒灰色シルト層・黄青灰色シルト層・青灰色シルト層（いずれも水田層）は、顕著な遺物は伴わないが、いずれも近世～現代のものであると考えられる。出土遺物は、2トレンチ4層目で土師器片3点の出土があるが、時期の判別ができるものではなかった。

今回の調査でとらえた段丘斜面が、古代においては土地利用境となったであろうと想定される。そのため、菟道地域一帯に展開する集落の西側への広がり、概ねそれより東におさまるであろうことが把握できたと考えられる。また、調査地以西では、未だ把握できていない弥生・古墳時代前期集落が展開している可能性も考えられる。今後の調査により明らかにされることが望まれる。



第25図 Iトレンチ全景（東から）



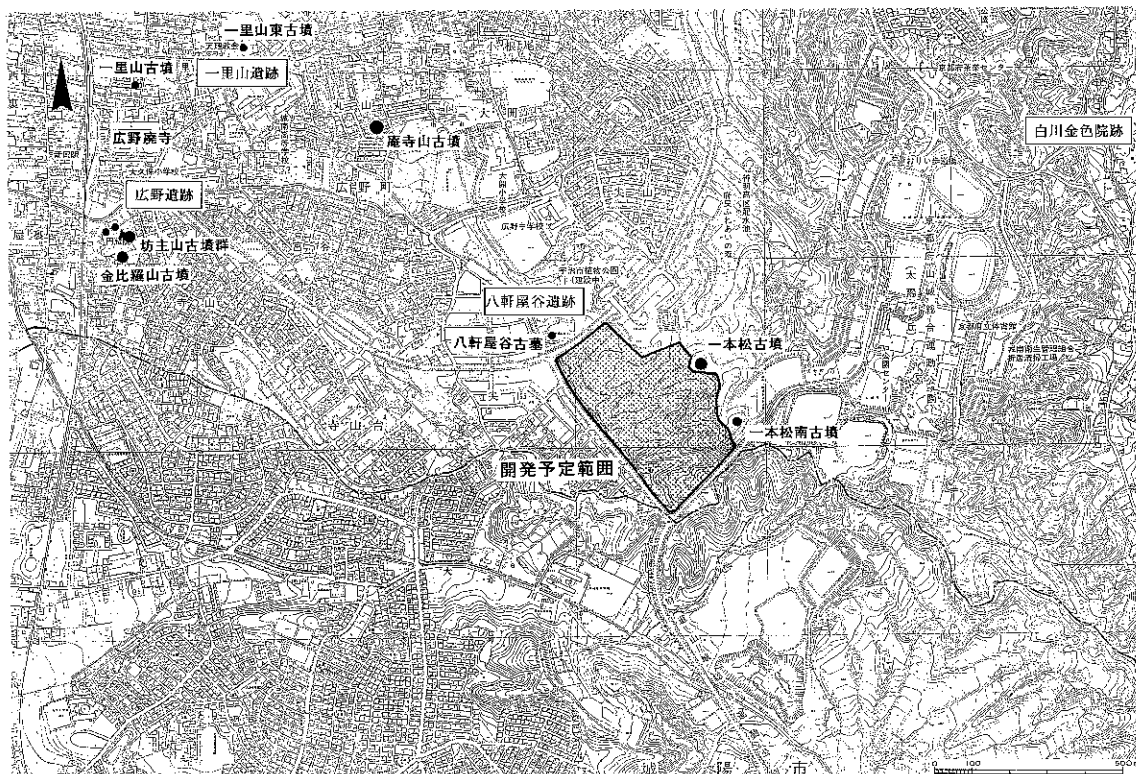
第26図 IIトレンチ全景（東から）

## IV. 立命館宇治高等学校移転予定地 埋蔵文化財発掘調査概要

### 1. はじめに

本概要は、学校法人立命館宇治高校が校地移転を予定している宇治市広野町八軒屋谷地内において実施した、埋蔵文化財の試掘調査の概要である。

今回調査の対象となった広野町八軒屋谷は、宇治市と城陽市の市境に当たり、京都府立山城総合運動公園に隣接する地点である。今回の対象地と山城総合運動公園との境界には、一本松古墳・一本松南古墳の2基の古墳が知られている。このうち一本松古墳は、昭和40年に山田良三氏によって発掘調査が行われ<sup>1)</sup>、竪穴式石室を埋葬施設とする古墳であることがわかった。そして墳頂からは二重口縁壺が出土していることから、久津川古墳群中最古の古墳と位置づけられている。また、対象地北西にある現在の宇治市植物公園内にはかつて古墳時代の竪穴住居が検出された八軒屋谷遺跡<sup>2)</sup>がある。これらの周辺の遺跡分布状況から判断すると、当該地においても遺跡が存在する可能性が考えられたため、対象地内の分布調査を実施し、その結果5カ所の古墳状の隆起と丘陵頂部の平坦面を確認した。このため、この6カ所を調査対象として、試掘確認調査を実施することとした。調査は平成11年2月12日から3月12日まで実施し、調査面積は111㎡である。



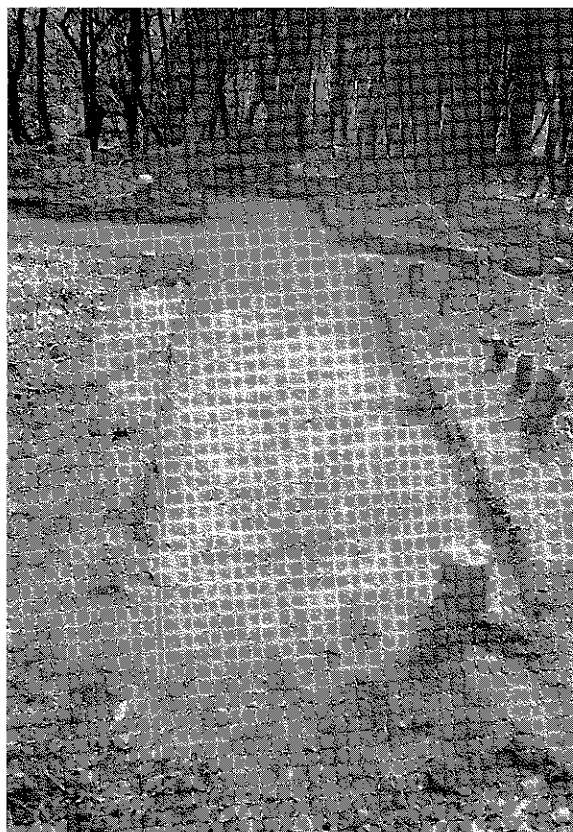
第27図 調査地の位置

## 2. 調査の概要

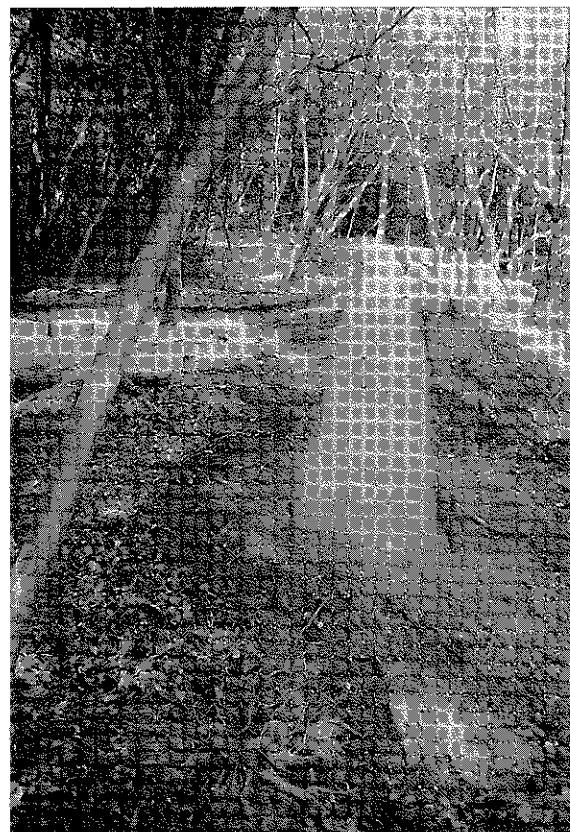
今回の開発範囲は、一本松古墳を最高所とする丘陵の中腹と谷部にあたる。調査対象に選定したのは、大きくはA～Cの3地区に所在する5地点である。A地区は、対象地北西部の丘陵上平坦部（Aトレンチ）、B地区は、Aトレンチ南側の谷にある古墳状隆起2ヶ所（Bトレンチ）で、C地区は、B地区南側の丘陵部にある古墳状隆起3ヶ所（C1～C3トレンチ）に当たる。

Aトレンチは、尾根筋である東西方向に長い15.0×1.3mと、南北に長い9.0×1.3mを組み合わせた十字形に設定した。Bトレンチは、2ヶ所の古墳状隆起を横断するよう南北に長い21.5×1.3mに設定し、それぞれの隆起頂部付近ではこれに直行する形で東西方向および東方向に拡張した。また、C1～C3トレンチは、地形や立木の条件からA・Bトレンチのような地形に沿ったトレンチの設定が困難であったため、隆起の所在するそれぞれの尾根線に直行する形で10.5×1.0m、8.5×1.0m、6.0×1.0mの範囲で設定した。

調査は、人力による表土除去から行ったが、いずれのトレンチにおいてもその直後である表土直下に大阪層群と見られる砂礫や黄褐色の粘土層を検出した。ここには、古墳をはじめとする遺構の存在は確認できなかった。また遺物の検出も見なかった。そのため、これらの各地点とも遺跡ではないと判断された。



第28図 Aトレンチ完掘状況（北から）

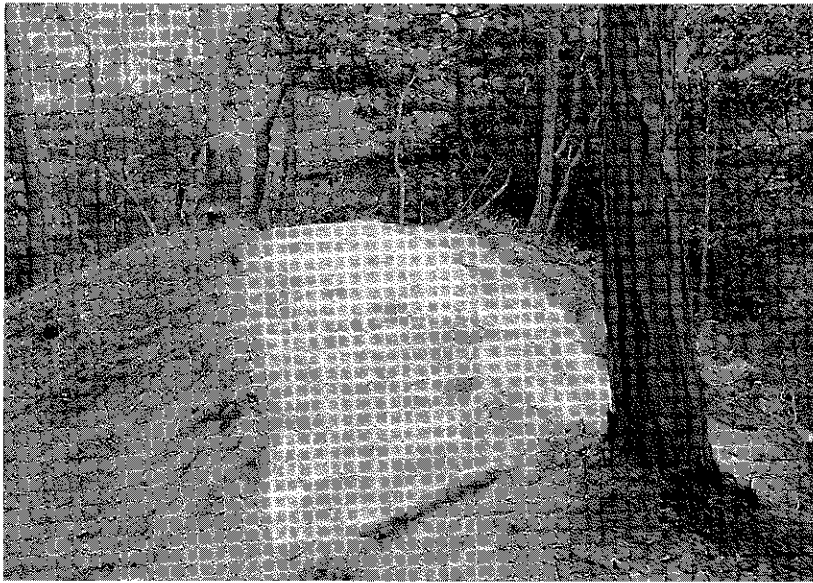


第29図 Bトレンチ完掘状況（北から）

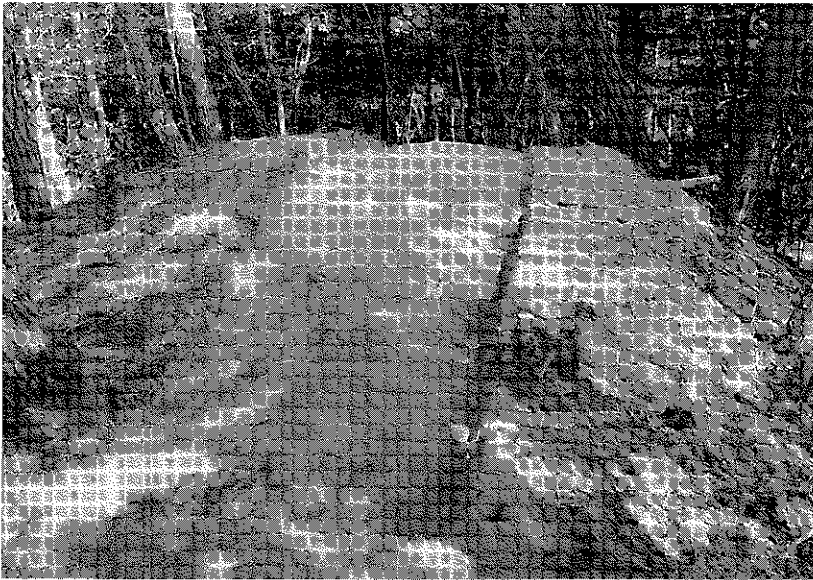


第30図 トレンチ配置図

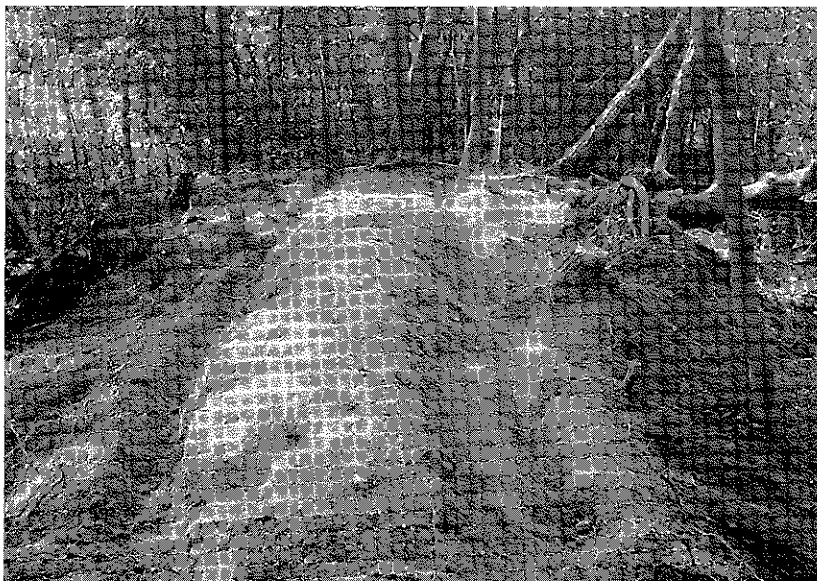




第31図 C1トレンチ完掘状況  
(北西から)



第32図 C2トレンチ完掘状況  
(東から)



第33図 C3トレンチ完掘状況  
(北東から)

註)

I. 木幡神社遺跡発掘調査概要

- 1) 1993 宇治市教育委員会 「II. 西浦遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第21集』
- 1994 宇治市教育委員会 『西浦遺跡発掘調査概報』「宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第30集」
- 1996 宇治市教育委員会 「I. 西浦遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第35集』
- 2) 1978 川西宏幸 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2
- 3) 1952 奈良国立文化財研究所 『平城宮発掘調査報告VI』
- 4) 1991 宇治市教育委員会 「I. 広野廃寺発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第17集』
- 5) 1995 宇治市教育委員会 『旦稜遺跡発掘調査概報』「宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第28集」
- 6) 1998 宇治市教育委員会 『菟道門ノ前古墳・菟道遺跡発掘調査報告書』「宇治市文化財調査報告第5冊」
- 7) 1996 宇治市教育委員会 「I. 西浦遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第35集』
- 8) 1992 三好美穂 「平城京の土器」『古代の土器研究—律令の土器様式の西・東—』古代の土器研究会

II. 妙見古墓・妙見遺跡発掘調査概要

- 1) 1991 宇治市教育委員会 『宇治二子山古墳発掘調査報告』「宇治市文化財調査報告第2冊」
- 2) 1991 宇治市教育委員会 「II. 池山瓦窯跡灰原想定地発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第17集』
- 3) 1933 柴田實 「宇治古代登窯遺跡」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告14』
- 4) 1998 宇治市教育委員会 『菟道門ノ前古墳・菟道遺跡発掘調査報告書』「宇治市文化財調査報告第5冊」
- 5) 下記のとおりである。(1980 黒崎直「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究紀要VI』より抜粋、一部追加)

遺跡名	構造	骨蔵器	年代	所在地	文献
広野古墓	凝灰岩石櫃	不明	8C中?	広野町八軒屋谷	1961 奈良博『天平の地宝』朝日新聞社
木幡古墓	小穴内に木炭充滿	須恵器 葉壺	8C後	木幡南山	1968 白石太一郎「宇治市木幡出土の蔵骨器」『古代文化』20-12
広岡古墓	火葬墓?	須恵器 長頸壺	8C中?	五ヶ庄広岡谷	1973 山田良三『宇治市史』第1巻
牟上り3号墳	横穴式石室内に納置	須恵器 短頸壺	10C?	菟道西牟上り	1987 (勸京都府埋蔵文化財調査研究センター「京滋バイパス関係遺跡」『京都府埋蔵文化財調査報告』第7冊

6) 3)と同じ

III. 菟道遺跡発掘調査概要

- 1) 1998 宇治市教育委員会 『菟道門ノ前古墳・菟道遺跡発掘調査報告書』「宇治市文化財調査報告第5冊」
- 2) 1987 宇治市教育委員会 『大鳳寺跡発掘調査報告』「宇治市文化財調査報告第1冊」

IV. 立命館宇治高等学校移転予定地埋蔵文化財発掘調査概要

- 1) 1966 山田良三 「山城宇治一本松古墳調査報告」『古代学研究42・43』
- 2) 1963 山田良三・石部正志「山城八軒屋谷土師遺跡調査報告」『古代学研究34』



## 抄 録

ふりがな	うじしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう だい45しゅう							
書名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第45集							
副書名	木幡神社遺跡、妙見古墓・妙見遺跡、菟道遺跡、立命館宇治高等学校移転予定地発掘調査概要							
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	第45集							
編著者名	荒川 史、吹田直子							
編集機関	宇治市歴史資料館							
所在地	〒611-0023 宇治市折居台1-1							
発行所	宇治市教育委員会							
所在地	〒611-8501 宇治市宇治琵琶33							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	原因
木幡神社遺跡 (木幡東中10-3)	宇治市木幡 東中10-3	26204	50	35° 54' 40"	135° 48' 05"	980907 ~ 981225	190 m <sup>2</sup>	保育所 建設
妙見古墓・妙見 遺跡 (菟道妙 見9-2 他18筆)	宇治市菟道 妙見9-2 他	26204	143	35° 52' 00"	135° 48' 58"	980430 ~ 980731	850 m <sup>2</sup>	宅地造成
菟道遺跡 (菟道谷下り36 -1、25-1地内)	宇治市菟道 谷下り36-1、 25-1地内	26204	64	35° 52' 10"	135° 48' 47"	981124 ~ 981130	20 m <sup>2</sup>	道路拡幅
立命館宇治高 等学校移転予 定地	宇治市広野町 八軒屋谷	26204		35° 51' 35"	135° 48' 30"	990212 ~ 990312	111 m <sup>2</sup>	学校建設
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
木幡神社遺跡	集落	奈良・室町 古墳	溝3、土壇6 他	土師器・須恵器・平瓦・ 丸瓦・陶棺・円筒埴輪・ 砥石他				
妙見古墓・妙 見遺跡	古墓 (古瓦散布 地)	奈良 (飛鳥後期)	骨蔵器(火葬骨) を埋葬する古墓1、 溝3、土壇1	須恵器・平瓦・銭貨・土 師器			単葬の火葬骨 埋葬墓。	
菟道遺跡	集落	近世	水田	土師器				
立命館宇治高 等学校移転予 定地							古墳状隆起の 確認調査。古 墳は存在せず。	

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報  
第45集

木幡神社遺跡、妙見古墓・妙見遺跡、菟道遺跡、  
立命館宇治高等学校移転予定地

発行日 平成11年3月31日  
発行者 宇治市教育委員会  
編集 宇治市歴史資料館  
〒611-0023 宇治市折居台1-1  
TEL 0774-20-1680  
印刷 有限会社 新進堂印刷所